私版眠れる森の美女

岳石祭人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私版眠れる森の美女

【Ｎコード】

Ｎ３２８８Ｄ

【作者名】

岳石祭人

【あらすじ】

別の世界で繰り広げられる「眠れる森の美女」の物語。美しいオーロラ姫の恋と真実の愛を巡る妖精リラと美貌の黒魔女の闘い。「黒魔女カラベラス物語」第１編。

第1章　命名式（前書き）

自分の理想の完璧なおとぎ話を書こうと書いたものです。
「妖精大進撃！」の前日談になります。
５年前に自分のホームページで発表したんですが、受けはイマイチでしたねえ・・。
再挑戦です。読んでくださいますでしょうか？
地図を作りました。
画像（６００＊４５０ｐｘ）はこちら→ｈｔｔｐ：／／ｅｉｇａｔｗｏ．ｕｐ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／ｉｍａｇｅ／ＭＡＰ．ｇｉｆ
ブログの記事はこちら→ｈｔｔｐ：／／ｅｉｇａｔｗｏ．ｓｅｅｓａａ．ｎｅｔ／ａｒｔｉｃｌｅ／８３４６１２１５．ｈｔｍｌです。

第1章　命名式

ロヴィークという国がありました。
立派な王様に治められ、国は富み、人々は豊かに暮らしていました。
王様とお后様の間に待望のお子さまがお生まれになると、人々は我がことのように喜び、国を挙げてのお祝いのお祭りとなりました。
お生まれになったのはお姫様でした。
七日の後、お城の大聖堂でお姫様の命名式が行われました。
国の中はもとより、お隣の国からも貴族やお金持ちの商人などのお客さんを迎えて、きらびやかに、でも高貴な人にふさわしい厳かさを持って式は進んでいきました。
式のクライマックスに小さな、特別のお客様が迎えられました。
妖精の国から女王様からお姫様の名前を預かって五人の妖精たちが来てくれたのです。
妖精たちはそれぞれ光がそのまま形を成したような美しい姿をしていましたが、その中でも特に美しいリラの精が皆を代表して女王様からお預かりした名前を贈りました。
「オーロラ」
こうしてお姫様はイリーナ・オーロラ・ロヴィーナと名付けられました。
五人の妖精たちは名付け親としてそれぞれお姫様に人生の手助けとなる贈り物をしていきました。
順番に姫の額に祝福の口づけをしながら、
一人は、美しさを。
一人は、賢さを。
一人は、優しさを。
一人は、健康を。
そして最後にリラの精が贈り物をしようとしたとき、突然、聖堂

に激しく冷たい風が巻き起こり、黒い、恐ろしい人影が現れました。
現れた黒い人影、それはロヴィークの人々の唯一の暗い不安の対象、国はずれの岩山に住む黒魔女カラベラスでした。
カラベラスは若い女の姿をしていましたが、本当はいったい何歳なのか誰も知りませんでした。
真っ黒なマントを羽織り、真っ黒なフードを被り、真っ白な顔は彫刻のように美しくも、黒い瞳には底知れぬ邪悪な闇を宿していました。
カラベラスはその黒い瞳でかごの中で柔らかな布にくるまれて眠るオーロラ姫をじっと見下ろしました。王妃様はとっさに姫に駆け寄ろうとしましたが、カラベラスに冷たい瞳を向けられて心臓を氷の手で掴まれたように震え上がってしまいました。
「カラベラス！　いったいなんの用？」
リラの精は敵意を隠そうともしないでカラベラスを睨みつけました。
カラベラスはリラの精に一瞥（いちべつ）をくれると王様、王妃様に向かって胸に手をやり深々と腰を折り、
「王様、王妃様、この度はお姫様のご誕生、おめでとうございます。心よりお祝い申し上げます」
と、丁重な挨拶をしました。
王様はひとまずほっとして来訪の礼を述べました。
カラベラスは起きあがると口許に笑みを浮かべ、眠る姫に歩み寄りました。
「なんとかわいらしいお姫様でしょう。私も姫に心ばかりの贈り物をいたしましょう」
カラベラスは左手を姫の上にかざすと言いました。
「姫は人々の愛情を受けて健やかに成長し、自身も優しい心を持ち、美しい乙女になるでしょう。そして素晴らしい若者と出会い、情熱的な恋をする」
カラベラスの左手から溢れ姫に注がれる光はその言葉が真実であ

ることを示す暖かな桃色をして、はらはらしながら見守っていた王妃様はほっと息をつき、カラベラスに感謝するように胸の前で手を合わせました。

しかし、カラベラスはニイッと恐ろしい笑いを浮かべると言い放ちました。

「しかし、姫が情熱的な恋の幸せの絶頂に至ったとき、それは姫の十七歳の誕生日、姫は糸車の針に突かれ、命を落とすであろう！」

カラベラスは右手を左手に重ね、注がれる光は紫色から真っ黒に変化し、姫の体に染み込んでいきました。オーロラ姫は火のついたように大声で泣き叫び、恐ろしさに震え上がっていた王妃様は勇気を振り絞って姫に飛びつくと、その小さな体をしっかり腕の中に抱きかかえて、黒魔女から守るように床にしゃがみ込みました。カラベラスは高笑いを上げて呪いの黒い霧を浴びせかけ、黒い霧は無情にも王妃様の背を突き抜けて泣き叫ぶオーロラ姫に染み込んでいきました。

「黒魔女め、姫から離れなさい！」

リラの精は腕を振るって光の矢を投げつけました。

カラベラスはひらりと避け、聖堂の中央へ立ちました。周りにいたお客たちは悲鳴を上げて聖堂の壁際へ逃げました。

王様は怒りを露わに衛兵たちに命じました。

「その魔女を突き殺せ！」

中央に集まってきた衛兵たちの槍がいっせいにカラベラスの黒いマントに突き立てられ、そのままカラベラスの体は宙に突き上げられました。

「ハハハハハハハハ……」

高笑いを残してカラベラスの体は黒い霧となって消えてしまいました。

王様は恐る恐るリラの精に訊きました。

「カラベラスは、死んだのか？」

リラの精は首を振りました。

「いいえ、あの恐ろしい黒魔女をふつうの力で殺すことは出来ないでしょう」
「それでは、姫は、魔女の呪い通り十七歳の誕生日に死ぬのか？・・・」
王妃様は絶望的な気持ちになって胸に抱いた姫といっしょに声を上げて泣きました。
リラの精は王妃様に飛んでいくとその肩に寄り添って、優しく、励ますように言いました。
「幸い私の贈り物が残っています。この贈り物の力で黒魔女の呪いをなんとかしてみましょう」
リラの精は両手を姫の上に広げ、カラベラスの呪いを取り払うように力を込めました。するとリラの精の手から発せられる光に吸われるように姫の体から黒い霧がじわじわ染み出してきました。王妃様は一心不乱に神に祈り、王様はじめ聖堂にいるすべての人々が手を合わせオーロラ姫が死の呪いから救われるように祈りました。
姫の体から染み出した呪いの黒い霧は、しかし、姫の体の回りを渦を巻いて漂い続け、リラの精の手は痛みにブルブル震えました。
「ああ、なんて強い黒魔女の力。わたしの力ではとても取り払うことは出来ないわ。でも・・・」
リラの精は渦巻く黒い霧に手を突っ込み、腕を真っ黒に染めていく痛みに負けないよう命がけで姫の幸せを願いました。すると、黒い霧は紫色の光を激しく発し、黒い霧は透明な青色に変わっていき、虹色の光を発するようになりました。
「黒魔女の力は強すぎて呪いを完全に解くことは出来ません。姫は十七歳の誕生日に糸車の針に刺されて呪いの眠りにつくでしょう。しかしそれは永遠の死ではなく、真実の愛を持った者の口づけで覚まされる・・・・・」
恐ろしい黒魔女カラベラスの呪いと闘ったリラの精は力つき、ぱったりと倒れてしまいました。
仲間の妖精たちが駆け寄り、リラの精はただちに妖精の国に連れ

帰られました。

呪いの死が眠りに変わったとはいえ、王様の心配はそれはひどいもので、国内での糸車の使用は禁止し、国中の糸車を集めてすべて燃やさせてしまいました。

第1章　命名式（後書き）

今年もあと3日。明日あさってで一気に掲載します。

２００７，１２，２９

第2章　十六歳の誕生日

時は過ぎ、オーロラ姫は十六歳の誕生日を迎えました。
オーロラ姫は輝くばかりに美しい少女になっていました。
髪は豊かな金色。
肌は透明に透き通り、
瞳は深い湖の青色、
唇は艶やかなバラの赤。
手足のスラリと伸びた細い体。
まだ十六歳の少女ながらその美しさは国に並ぶ者のないほどでした。
王様は姫のためにお城で盛大な誕生パーティーを開きました。
招待客たちがそれぞれ豪華なお祝いのプレゼントを持って訪れ、豪華な食事会と舞踏会が行われました。
きらびやかに飾り立てられた大ホールに王様ご自慢の楽団が奏でる美しく楽しい音楽が流れ、オーロラ姫は招待の若者たちと順番に楽しく踊っていきました。
オーロラ姫のお相手を務める若者たちはそのあまりの美しさにぼーっとなり、皆いつまでもいっしょに踊っていたいものですから、順番を巡ってけんかが起こるほどでした。
しかし、そんな若者たちもたった一人だけ、どんなに長くオーロラ姫を独占していても文句の言えない相手がいました。
それはお隣の国ルービッシュのシルバー王子でした。
シルバー王子はオーロラ姫とは幼い頃よりの仲の良いご友人で、オーロラ姫は王子を兄のように慕っていました。
二十歳になるシルバー王子は背が高く、鍛えられたたくましい体をし、神々の彫刻のように整った美しい顔立ちをし、強く優しく、行いも清く正しく、自国はもとより、ロヴィーク国でも人々にとても人気の高い立派な王子様でした。

立派な若者に成長した今ではオーロラ姫の将来の一番の花婿候補でした。
二人の踊る姿に、招待のお客たちは微笑ましくも羨望のため息を吐き、王様と王妃様も姫の健やかな成長を喜びつつ、将来を思ってますます満足そうに笑みを浮かべるのでした。
と、そこへ、見かけない若い王子が現れました。
ずいぶん背の低い可愛らしい王子様でしたが、凛とした気品にあふれ、きっと立派な一族の王子であることが思いはかられました。
王様は式典長を呼んで誰であるのか訪ねましたが、式典長は招待客のリストを調べながら思い当たる名前を見つけられず額に汗を浮かべました。
謎の王子はひとり華麗なステップを踏みながら踊るオーロラ姫とシルバー王子に近づいていき、スルリと横から手を割り込ませると、そのままシルバー王子からオーロラ姫を奪い取って踊りの相手に納まってしまいました。
周りのお客たちは、どこの大貴族の王子であろうと、そのあまりに大胆で無礼な行為に眉をひそめ、シルバー王子がどういった態度に出るか緊張して見守りました。
温厚なシルバー王子もさすがにムッとして謎の王子を睨みましたが、謎の王子は悪びれる風もなくニヤリと笑うとウインクを返してきました。シルバー王子はなんて嫌な奴だろうとますます腹を立てましたが、ふと相手の正体に思い当たり、まじまじと顔を見つめました。
オーロラ姫はすっかり混乱してしまいました。この無礼な可愛らしい王子に腹を立てているというのに、シルバー王子がおかしそうに笑い出したではありませんか。
「あなたはどちらの王子様でしたかしら？」
オーロラ姫は尋ねましたが、謎の王子はじっとオーロラ姫を見つめるばかりで答えません。
「さあ姫、楽しく踊りましょう。私にあなたの成長ぶりを見せてく

ださいな」
謎の王子は実に巧みにオーロラ姫をリードしていきました。とても柔らかく、時に驚くほど大胆に。困惑していたオーロラ姫も徐々にダンスに夢中になり、すっかり楽しい気分になって王子のリードに体をゆだねてしまいました。
すると、オーロラ姫は王子が実は王子ではなく女の人であることに気づいてハッとしました。
「あなたはいったい誰なの？」
男装の美しい女性は楽しそうに微笑んで悪戯っぽく言いました。
「あなたの秘密のお友達よ。あなたのうーんと幼い頃からのね」
誰だろう？と、オーロラ姫は胸をドキドキときめかせました。
二人の踊りは飛び跳ねるようにどんどん大きくなっていき、回りのお客たちは歓声をあげて飛び退きました。
大ホールは大いにわいて、王様も愉快そうに笑っていましたが、一人、王妃様だけはなぜかひどい胸騒ぎがして、居ても立ってもいられない気分でした。
踊る二人はクルクル回りながら、ふわりと、床を離れ、宙に浮き上がりました。
王妃様は鋭い悲鳴を上げて駆け出しました。
「私のオーロラを返しなさい！」
光に包まれた二人がゆっくり降りてきて、ホールはしいんと静まりかえりました。
謎の王子はオーロラ姫の手を離し、王妃様に向かって深々とお辞儀しました。
「これは王妃様、突然の来訪の上、礼を欠いた振る舞い、どうぞお許しください」
ふわあっと王子の体から光が発し、謎の女性はその正体を現しました。
それは、あのリラの精でした。
リラの精は不思議と立派に人間と同じ背格好をして立っていまし

た。
「おお、これはこれは、リラの精！　よくぞ来てくださった！」
王様は驚き感激して両腕を開いて歩み寄り、しっかり手を握りました。
王様はリラの精の耳に口を当て、小さな声で尋ねました。
「突然どうされたのです？　もしや姫の身に何かまた危険が迫っているのではありますまいな？」
リラの精は王様にだけ聞こえる声で答えました。
「ようやく女王様の許しを得てまいりました。私の力が及ばず黒魔女の呪いを完全に解くことは出来ませんでした。呪いの期日が近づけば黒魔女はまた必ず何か良くないことを仕掛けてくるでしょう。王様のお許しがいただけるなら私はこのままこちらにとどまり、オーロラ姫をお守りしたいと思います」
「それは願ってもない！」
周りの人たちは王様が突然大きな声を上げたので何事かとびっくりしました。
王様はおっほんと咳払いして言いました。
「皆さん、リラの精はしばらくこちらに滞在が可能とのこと。ぜひとも我が城にご滞在をお願いしようと思う」
おお、それは素晴らしい、と皆から拍手がわきました。
リラの精はオーロラ姫にニッコリ笑いかけました。
「オーロラ姫、どうぞよろしくね」
「こちらこそ」
オーロラ姫もとても嬉しそうにニッコリしました。
「妖精のお友だちができるなんて、最高のお誕生プレゼントだわ！」
リラの精は場が収まるとそっとシルバー王子を人の居ない隅に呼んで話しました。
「どうやらあなたはわたしの正体に気づいたようね？」
王子は照れくさそうに頷いて言いました。

「僕もオーロラの命名式に立ち会っていましたから。あの時のことははっきりと覚えています」
あの時王子はまだ四歳のほんの子供でしたが、父親に手を握られ、あの恐ろしい光景をしっかり見つめていたのでした。
「オーロラには呪いのことは何も知らされていません。あの場にいた者達には王様からきつく口止めがされているのです」
「承知しています。あなたもオーロラ姫とずうっと仲良くおつき合いしながら、そのことをけっして口にしなかったのね」
リラの精に目を覗き込まれてシルバー王子は思わず頬を染めました。
リラの精はニッコリ笑って言いました。
「あなたは真実の愛の心を持っているようね。黒魔女に対抗する一番の武器だわ」

第3章　指輪

リラの精は人間の姿になってユリアと名乗りました。
二人でお茶を飲んでいるときにオーロラ姫は不思議に思って尋ねました。
「妖精はみんな人間の姿になれるの？」
「いいえ、特別の能力を持った一部の種族と、特に長生きの数人の妖精しか人間に変身することは出来ないわ。わたしは、女王様に特別に力をいただいたの」
ちょっと面白いことをしてみましょうか、とユリアはお行儀悪くテーブルの上に立つと、
「抱きとめて！」
と言うとオーロラ姫めがけて飛びつきました。
オーロラ姫はびっくりして反射的に両手を広げて差し出すと、ユリアはフワリとその腕の支えの上に脚と背中で降りました。
ユリアの体は鳥の羽根のように軽いのでした。
オーロラ姫は不思議そうに抱きとめたユリアの体を触ってみました。ほとんど重さを感じないのに手触りはしっとりとなめらかで、人間の肌とまるで変わらないのです。
本当のところ、リラの精もなぜ自分が人間に変身できるのか不思議でした。
オーロラ姫の命名式で命に関わる大けがをしたリラの精は、妖精の国に帰って女王様に手当てしてもらったのですが、その治療の過程で、たぶん、そういう力をもらったのだろうと思っていました。
リラの精ユリアのおかげで、オーロラ姫の生活はとても楽しいものになりました。
オーロラ姫は生まれてからというものお城を出たのは国の大事な行事の時のほんの数回しかありませんでした。

お城は街を見下ろす小高い丘に建って、ロヴィークは豊かな国でお城はとても大きく広かったので、窮屈に感じることはありませんでしたが、毎日の生活は決まり切っていて退屈で仕方ありませんでした。

オーロラ姫はそれはそれは大切に育てられていましたから、あんまり大事にされすぎて、まるで壊れやすいガラス細工でも扱うような慎重さでした。オーロラ姫は幼い頃から自由気ままに遊び回れるふつうの子供たちをどれほど羨ましく思ったかしれません。お城の広い廊下をほんのちょっと走っただけで侍女たちが悲鳴を上げて追いかけてくるのですから。大きくなれば少しは自由に行動できるかと思いましたが、侍女たちのガードはますます堅く、お城のお庭を散歩するだけでも侍女や女中たちがぞろぞろ付いてきて、お庭の周囲を衛士たちがぐるりと取り囲むような有様で、オーロラ姫はもうあきれてため息しか出ませんでした。

その点、ユリアはまったくふつうのお友だちとしてオーロラ姫に接してくれました。

ユリアも最初、ぞろぞろ付いてくるお付きの者達にびっくりして、王様に掛け合って用を言いつけるための女中をほんの二三人付けるだけに減らしてもらいました。その女中たちとも鬼ごっこをしたり、蹴鞠をしたり、オーロラ姫は子供の頃から憧れていたお遊戯に大喜びで夢中になってしまいました。

幼い頃よりオーロラ姫を身近にお守りしてきた侍女は嘆き悲しんで王妃様にご注進に向かい、王妃様はびっくりしてユリアを呼び出しました。

王妃様は、オーロラ姫がケガなどしたらたいへんだと、ユリアに厳しく言いましたが、ユリアは、むしろ一生懸命運動して体を鍛えた方が健康にいいと、二人の意見はまったく合いませんでした。

ユリアは頑固な王妃様にため息をついて、仕方なく、言いました。

「オーロラ姫が大きなケガや病気で苦しむようなことはありません。少なくとも、十七歳の誕生日までは絶対に。姫の健康は、あのカラ

ベラスが保証しているのですから」
王妃様はその言葉を聞くと、ユリアが気の毒なほど落ち込んでしまいました。王妃様は愛する娘を失うのが怖くて怖くて仕方なかったのです。
ユリアは王妃様の手を取って優しく励ましました。
「どうぞご心配なさらないで。オーロラ姫はきっと大丈夫。だってこんなにも強い愛を受けているのですから。私たちがするべきことは、オーロラ姫を、何も特別ではない、ふつうのかわいい女の子に育てることです。オーロラ姫はきっと自分で真実の愛を見つけだしますわ」

しかし、そうは言うものの、王妃様の娘を心配する気持ちはいっこうに晴れることはなく、心の安らぐときがありませんでした。
お気の毒な王妃様は、あの時黒魔女の呪いの黒い霧を浴びたせいか、すっかり病気がちになり、いつもどこかしら体調が思わしくないのでした。
特に、毎夜悪夢にうなされ、それはオーロラ姫の成長と共にひどくなる一方で、十六歳の誕生日を過ぎてからは際だって恐ろしい夢となり、夜中何度も何度も目を覚まし、ひどい寝不足となり、体はますます弱っていくのでした。
あんまり王妃様のご様子がお悪いので、とうとうお付きの女官が、街で評判の占い師に見てもらってはいかがでしょうかと、申し上げました。
街で評判の占い師とは、旅回りのジプシーの女占い師で、とてもよく当たってなんでも知っていると、城の女どもの間でもおしゃべりの度に噂に上っていました。
もっとも、そのおしゃべりを小耳に挟んだユリアは、
「そんなのはどうせインチキに決まっているわ」
と、完全にバカにしていましたが……

王妃様はすっかりオーロラ姫と仲の良くなっているユリアへの対抗意識もあって、内緒でこっそりその女占い師を城に招きました。
やってきた女占い師は全身黒ずくめの上、頭からすっぽり黒いショールを被り顔を隠していましたので、王妃様はあの黒魔女カラベラスを思いだして嫌な感じを受けましたが、女占い師は王妃様の前に立つとすぐにショールを取り、占い師イザベルと名乗りました。
占い師イザベルは浅黒い顔に異国の派手な化粧を施していましたが、なかなか美しい女でした。
王妃様もこの占い師を全面的に信用していたわけではないので、とりあえず、夜よく眠れるおまじないなどはないかと、尋ねられました。
イザベルは最初から何を訊かれるのか分かっていたように、腰に下げた袋から麻の小袋を取り出し、胸にジャラジャラぶら下げているいろいろな色の石のアクセサリーの中から青い棒状の石を取り外し、小袋に入れて渡しました。
「その袋にはジプシー秘伝の眠りを誘うハーブが調合されています。夜枕元においておけば心を落ち着け、自然と眠りの世界へと王妃様を導くでしょう。そして、差し入れた青い石は、王妃様を悩ます悪夢から健やかな眠りを守ってくれるでしょう」
王妃様は毎夜悩まされる悪夢については一言も話していませんでしたから、この占い師を気味悪く思いましたが、小袋は受け取り、謝礼を持たせて城を下がらせました。

夜、王妃様は気休めくらいにはなるだろうと枕元に小袋を置いてベッドに横になりました。すると甘さとさわやかさの絶妙に混じり合った香りが漂ってきて、王妃様は香りを嗅ぎながら、すぐにぐっすり眠り込んでしまいました。そして朝まで一度も目覚めることなく、何年かぶりに実にさわやかに目覚めることが出来ました。
目がぱっちり開いて、十歳も若返ったようでした。
オーロラ姫とユリアは実に若々しく上機嫌の王妃様にびっくりし

て、不思議そうに眺めました。

王妃様はすっかりイザベルを信頼し、またこっそりお城に呼びました。

上機嫌で礼を述べる王妃様に、しかし、イザベルは言いました。

「それはけっこうでございました。しかしながら、それは一時しのぎのまやかしに過ぎません。王妃様のご心配ごとは一包みのハーブごときで解決するほどたやすいものではないはず」

王妃様はイザベルを信用しつつも、城の外の者にいったいどこまで話してよいものやら思案に暮れました。

イザベルは王妃の心などお見通しとばかりに言いました。

「王妃様の心を占める心配事とは娘オーロラ姫様のことでありましょう。オーロラ姫様にはどうやら恐ろしい呪いが掛けられているご様子・・・」

王妃様は真っ青になってイザベルを叱りつけました。

「おまえはそれをどこで聞き出したのです！？」

イザベルは少しも悪びれることなく言い放ちました。

「呪いは王妃様ご自身のお心とお体にも悪い影響を与えているご様子。それほど恐ろしい呪いを掛けられる黒魔女とは、岩山に住むカラベラスを置いて他にはないと存じますが？」

王妃様はがっくりうなだれ、頭を抱え込みました。

「その通りです。あの子、オーロラには黒魔女カラベラスの呪いが掛けられているのです」

王妃様はつい、胸に抱え込んでいる不安の元であるオーロラ姫の呪いについてイザベルに話してしまいました。

イザベルは神妙な面持ちで聞いた後、言いました。

「リラの精は若い妖精の中では特に優れて強い力を持った妖精。妖精の世界では次の女王に選ばれるのではないかと噂されるほどの方ですが、それでもカラベラスにはかなわないでしょう」

イザベルはうなだれる王妃様のご様子を窺いながら、遠慮がちに

言いました。
「私の知っている中にただ一つ、カラベラスの呪いをはねつける方法が、あるにはあるのですが・・・、しかし、きっとリラの精は反対するでしょう。なにしろあの方は、能力は高くともそれを鼻に掛けて謙虚さに欠け、現女王とも折り合いが悪いという噂ですから・・・・」
王妃様はビクリと体を震わせ、身を乗り出してイザベルに問いただしました。
「おまえはカラベラスの呪いを解く方法を知っているというのですか？」
イザベルは我が意を得たりと、にんまり笑って、囁くように言いました。
「リラの精でもかなわなかった強い呪いを私ごときが解けるものですか。しかし、その呪いを意味のないものにすることは出来ます。オーロラ姫様ご自身にカラベラスにも匹敵する魔力を与えるのです」
「いったいどうやって？」
王妃様はすっかりすがるようにイザベルににじり寄りました。
イザベルも王妃様に近づき、耳元に囁きかけました。
「あまりに強い魔力を持つが故、妖精の女王によって封じられた魔法の指輪の作り方を私は知っております。材料さえ揃えていただければ作って差し上げますが」
王妃様はイザベルから揃えるべき材料を聞き出し、きっと集めると約束しました。
イザベルは満足そうに頷き、王妃様に念を押しました。
「これはあくまでご内密に。リラの精に知れれば必ずや邪魔をするでしょうから。もしオーロラ姫が魔力を持ってご自分で身を守れるようになれば、リラの精はお払い箱になってしまいますものね」
王妃様は王様にも、もちろんユリアにも内緒で、イザベルに教えられた材料を集め出しました。

火の山に眠る赤い石。
深い谷に潜む緑の石。
湖の奥底に沈む青い石。
氷に閉ざされた聖なる山の黄金。
莫大なお金が費やされ、幾人もの男たちがお宝を求める冒険の中で命を落としていきました。
そしてとうとう、二月（ふたつき）の内にはすべての材料が揃えられました。

王妃様は早速イザベルを呼んで指輪を作るように命じました。
イザベルは材料を確かめた後、かしこまって言いました。
「私は方法は知っておりますけれど、それとは別に、指輪を作るには特別の腕を持った職人が必要なのです。
指輪を作るには、その特別な台座を彫り出す間、いっさい光を当ててはならず、深い洞窟の奥底に一月もこもりきりで作業しなければなりません。しかもその指輪が力を得るにはその持ち主にある言葉を言わせねばならず、そのためにはオーロラ姫様の指に合わせて作り上げねばなりません」
王妃様は悲痛に叫びました。
「そんな神業のような腕を持った彫金師はこの世にいやしないわ！」
イザベルは平気な顔で言いました。
「どうぞご安心を。その者はすでにお城の外に待たせてあります。誰か使いをやって呼んでいただけますか？」
王妃様は使いを出してその者を連れてこさせました。
やってきたのは、整った美しい顔立ちの若い男でしたが、表情というものがまったく感じられず、どことなく薄気味悪い感じがしました。
「この者は国外れのブルシナの町に住む彫金師で、マリオンと申します。ご覧の通り生まれながらに目が弱く、ほとんど見えておりません」
イザベルはマリオンの目の前にさっと手を振り上げましたが、マ

リオンの目はピクリとも動きませんでした。
マリオンの宝石のような真っ青な瞳はまっすぐ向いたまま何も見ていないのでした。
「王妃様、この男に一度だけオーロラ姫の手に触れることをお許しください」
王妃様はなおも気味悪く思いながら、仕方なしに、女中をオーロラ姫を呼びにやりました。
オーロラ姫はユリアといっしょにやってきました。
イザベルがかしこまって口上を述べました。
「我らは旅の占い師。お手を拝借いたしますれば、たちどころに、現在、過去、未来をピタリと当ててみせまする」
王妃様もお芝居をしてオーロラ姫に言いました。
「この者達は今街で評判の占い師よ。よく当たるそうだから試しに見てもらってはどう？」
ユリアはいかにも胡散臭そうに二人を眺め回しましたが、オーロラ姫はおもしろがって、求められるまま左手を差し出しました。
マリオンはうやうやしく姫の手をいただいて、言いました。
「あなたには二つの大きな力が味方についていらっしゃる。その者達を心から信頼する限りあなたは永遠に幸せでいられるでしょう」
ユリアもちょっぴり感心して、挑むように自分の手相も見てもらいました。
「あなたはいずれ強大な敵と戦わねばならないでしょう。その敵に打ち勝ったとき、あなたの愛は永遠のものとなるでしょう」
マリオンは材料を受け取り、月のない夜、岩山の洞窟の奥深く入っていきました。
七日目の夜、マリオンは完成した指輪を黒い袋に入れて洞窟から出てきました。
指輪を持ってお城を訪ねてきたマリオンに王妃様はびっくりしま

した。指輪の完成はもっとずっと先のことだと思っていたのです。いい加減に作ったのではないかと疑って中身を確かめると、それは目を見張るほどに美しい変わった形の物で、王妃様は大変満足されました。

なんとも間のよいことに、その日は丁度朝からシルバー王子が遊びに来ていました。しかも邪魔なユリアまでも妖精の女王様からの呼び出しで王子と入れ違いに妖精の国に帰っていきました。

王妃様はマリオンに報酬を払って下がらせると、王子を呼び、指輪を差し出して言いました。

「異国より面白い指輪を手に入れました。是非あなたの手で姫の指にはめてあげてください」

王子も指輪の見事な細工を見て、喜んで引き受けました。

オーロラ姫が呼ばれてやってきました。

「あなたに贈り物があります。シルバー王子から受け取りなさい」

王子は指輪の不思議な形にちょっと戸惑いながら、姫の左手にはめてあげました。

指輪は、リングに中指を通すと、赤、青、緑の綺麗な石と、それを囲む細かな金の装飾が手の甲を覆うような形になっているのでした。

オーロラ姫は指輪をはめた左手を掲げると、思わず歓声を上げました。

「まあ、わたしの手にぴったりだわ！」

すると、突然、指輪はキラキラ輝きだし、すぐにもの凄い光を発するようになりました。

オーロラ姫は怯えて指輪を外そうとしましたが、どうしたことか、指輪は肌にぴったり張り付いて、少しもずれようとしませんでした。

リラの精は空を飛び、急ぎお城に向かっていました。

妖精の国に帰ってみると、女王様はリラの精を呼んだ覚えはないと言い、女王様の呼び出し状は偽物であることが分かったのです。

女王様の呼び出し状を偽造するなど誰にでも出来ることではありません。
カラベラス。
リラの精はすごく嫌な胸騒ぎがしてお城への帰り道を大急ぎで辿っているのでした。
お城が見えてくると、なんと、お城の窓という窓からふつうではない強い光が迸(ほとばし)っているではありませんか！
リラの精はオーロラ姫の気配を探って、王妃様の私室に飛び込みました。するとオーロラ姫が泣きそうな顔で強い光を発する指輪を外そうと一生懸命になっていました。
シルバー王子が姫の手を取って、どうしたら外れるのだろうと探ってみましたが、突然三つの宝石から雷が走り、王子は弾かれてひっくり返りました。
王様も衛士を引き連れ何事かと駆け込んできました。
リラの精はオーロラ姫の指輪の正体を見極め、絶望的に叫びました。
「それは雷(いかずち)の指輪！　いったい誰がそのような物を姫の手に！？」
オーロラ姫やシルバー王子、それにリラの精に見つめられ、王妃様はおろおろしながら占い師に教わって指輪を作らせたことを白状しました。
「ああ、なんてこと、あの女こそカラベラスだったんだわ！」
リラの精は自分の不覚に地団駄踏んで悔しがりました。
どうやらカラベラスに利用されたようだと悟った王妃様はリラの精にすがるように尋ねました。
「この指輪はオーロラを守ってくれる物ではないの？」
リラの精は首を振り、悩ましく言いました。
「確かに普通の者はけっして姫を傷つけることは出来ないでしょう。この指輪は遙か昔、暴君が民衆を支配するために天才的な錬金術師に作らせた物なのです。これは怒りや憎しみや不安といった人の負の精神を吸い取り、力として放出するのです。人を傷つけることな

ど思いもしない姫にはまったく不要な物。それどころか、姫には重い心の負担となることでしょう。強い魔法物はそれ自体力の行使を求めるもの。その暴君も、周りに誰も寄りつかなくなり、ついに孤独に耐えられなくなり狂い死にしたと言います」

オーロラ姫は恐ろしさに震え上がってしまいました。

「どうしてそんなものをわたしに・・・」

オーロラ姫は物問いたげな目を王妃様に向けました。

王妃様は自分のしてしまった恐ろしい過ちにうなだれるばかりでした。

リラの精は王様に何事かお伺いを立てました。

「やむを得んだろう」

王様も深い深いため息をおつきになりました。

「オーロラ姫、よく聞いて」

リラの精はオーロラ姫にまっすぐ向き合って言いました。

「あなたには黒魔女カラベラスの呪いが掛けられているの」

そうして命名式でのことを話して聞かせました。

オーロラ姫は突然の思いも寄らない自分の恐ろしい運命にしばし呆然としてしまいました。

リラの精はしっかりオーロラ姫を励ますように言いました。

「わたしの愛するオーロラ。心を強く持って。真実の愛を信じる心を持ち続ける限り、その指輪はけっしてあなたの心に付け入ることは出来ない。そしてカラベラスの呪いさえうち破る真実の愛にあなたの心が満たされたとき、あなたは黒魔女の呪いからも、指輪の束縛からも解放されるわ」

オーロラ姫はうなずき、ニッコリ笑って言いました。

「信じるわ、真実の愛を。わたしにはあなたのような素敵なお友だちが付いていてくれるのだもの！」

第４章　もう一人の王子

王様はただちに黒魔女カラベラスと見られる女占い師の行方を追わせましたが、見つけだすことは出来ませんでした。

一方、指輪を作った張本人であるマリオンは、自分の町に帰る途中で見つかり、すぐにお城に引き立てられました。

王様は役人をブルシナの町に遣わし、マリオンの素性を調べさせました。

マリオンは確かにブルシナの装飾品工房に勤める職人で、出身は近くの普通の農家の息子で、特に怪しいところはありませんでした。マリオンもまた、その腕を見込まれてカラベラスに利用された被害者の一人であろうというのが大方の見方でしたが、大事な姫に呪いを掛けられた王様の怒りは治まらず、審議は長引きました。

そこへ、マリオンの故郷からマリオンの許嫁（いいなずけ）を名乗る村娘が訪ねてきました。

娘はディナと名乗りました。

ディナは田舎ものらしくあか抜けないところがありましたが、黒髪の豊かな、情熱的な眼差しの、なかなか美しい娘でした。

ディナは、

「マリオンはわたしとの結婚の約束を果たすために早く一人前の職人になるように一生懸命努力しただけですわ。その努力の成果を魔女の魔力といっしょにするなんてマリオンがあんまりかわいそうですわ！」

と、いかめしい顔の検事に必死にマリオンの無実を訴え、結果、更に詳しい調査が行われることになりました。

問題にされているのは、果たして本当にマリオンはカラベラスと何もつながりがないのか、マリオン自身危険な魔力を持ってはいないかということでした。

まったく光の差さない暗闇の中であれほどの細工物をほんの数日

間で彫り上げるということがそもそも人間業ではないように疑われていたのです。
田舎からマリオンの両親が連れてこられました。
連れてこられた両親は揃って美しいマリオンとは似ても似つかない無骨者で、マリオンへの疑いはますます強まってしまいました。
一方マリオンに何かしら魔力らしいものが備わっていないか調べていたユリアは、マリオンの額に大変なものを発見しました。
額にふうっと息を吹きかけると、なんと妖精のキスマークが浮かび上がったのです。
妖精の祝福を受けた者、それはだいたいの場合、身分の高い貴族の子か、力のある商人の子か、特別に才能のある芸術家に限られていました。
ユリアはそれが誰のキスマークであるのか調べました。妖精たちは妖精の国の決まりにより一人が一人の人間にしか祝福のキスをしてはいけないことになっていたのです。祝福の口づけをした妖精が分かれば、すぐにその子の身元が分かるはずです。
ユリアが再び息を吹きかけると、それは青い綺麗な輝きを放ちました。
サファイアの輝きでした。
ユリアはただちに手紙をしたため、魔法で鳩に変えて妖精の国に飛ばしました。
マリオンがどこか高貴な家の子らしいと分かって、問いつめられた両親は真っ青になって話し出しました。
実はマリオンは二人の間にできた子ではなかったのです。
二人の間にも子どもがありました。しかし生まれてすぐに息絶えてしまい、二人は揃って嘆き悲しみました。その時、表で赤ん坊の泣き声がして、かごに入れられた赤ん坊が捨てられていました。二人はこれは天からの授かりものであろうと、赤ん坊を自分たちの子として育てることにしました。
捨てられていた赤ん坊、それがマリオンだったのです。

父親は恐る恐る懐から捨てられていたマリオンがくるまれていた産着を差し出しました。
それを見て王様はまさかと我が目を疑いました。
ちょうどそこへユリアの手紙を受け取ったサファイアの精がやってきました。
ユリアはさっそくサファイアの精に尋ねました。
「あなたが祝福したのはどこの誰なの？」
「わたしが祝福したのは」
サファイアの精は得意げに言いました。
「ラピス国のラズベリー伯爵家のお坊ちゃん、ルピネーちゃんよ」
その通り、マリオンの父親が差し出した産着に縫い込まれていた紋章は、隣の隣の大国、ラピス国の、国王以上に力があると噂される大貴族ラズベリー伯爵家の紋章だったのです。

王様は大慌てでラズベリー伯爵家に問い合わせの使者を遣わしました。
ラズベリー伯爵家から膨大な量の伯爵家一族の肖像画を携えて骨相学の権威がやってきました。
博士はマリオンの顔かたちを子細に検分して肖像画の束の中から似た顔立ちを探しました。すると何代もさかのぼった分家の中によく似た顔立ちの男性を発見しました。なにぶん百年以上も前のことであり、名前をイリスと言うのみで、詳しい記録は失われてしまっていましたが、博士はこれをもってマリオンを十六年前何者かによって誘拐された伯爵家の長男、オレグ・ルピネー・ビクトル・ラズベリーその人であると断じました。
サファイアの精はあきれかえって、
「そんなこと、わたしの祝福の口づけがあるのだから決まっているでしょう」
と言いました。
それにはユリアこそあきれかえって、

「それならどうしてルピネーが誘拐されたときすぐに見つけだしてあげなかったのよ？」
と攻めました。
サファイアの精はばつが悪そうに答えました。
「だって、わたしそのとき風邪をひいちゃって鼻が利かなかったんですもの」

マリオンは黒魔女の手先から大金持ちの伯爵家の跡取りになってしまいました。
ラピス国から伯爵夫妻がやってきて、十六年ぶりの親子の対面がなされました。
二人とも高貴な身分にふさわしいそれはそれは美しい方たちでした。
お二人はそれはそれはお喜びになり、マリオンの育ての親である農家の夫婦に多額のお礼をお与えになりました。
めでたしめでたしというところですが、ただ一人かわいそうなのは身を挺（てい）してマリオンの無実を訴えた許嫁のディナです。マリオンが伯爵の跡取り息子と分かった以上、田舎娘のディナとの婚約は解消されたも同然でした。
伯爵はディナにもお礼のお金を与えようとしましたが、ディナは受け取りませんでした。
気の毒に思ったオーロラ姫は王様にディナをお城に雇って女官の見習いをさせることを提案しました。お城で働く若い女たちの中にはお行儀見習いのために預けられている貴族や商家の娘が多くいたのです。
王様はディナが全くの田舎娘であり、伯爵の手前もあって、この提案には渋い顔をしました。
「あら、お父様、わたしの頼みを聞いてくださらないの？」
オーロラ姫がプンプン怒って腕を組むと、ギラリと、左手の指輪が怪しい輝きを放ちました。

王様は震え上がってディナをお城に迎えることにしました。

第5章　二人の王子

マリオン、いえ、ルピネーは伯爵夫妻と共に生まれ故郷であるラピス国へ帰っていきました。

お城に残ることになったディナはオーロラ姫お付きの侍女の見習いに付きました。

お城でのお仕事はいちいち面倒なもので、オーロラ姫に関していうと、オーロラ姫の生活全般を管理する女官という人がいて、お側に仕えて身の回りのお世話及び護衛を務める侍女という人たちがいて、更に姫のご用を言いつかったり、女官や侍女の指示で働く女中という多くの人たちがいました。

ディナは侍女見習いという身分でしたが、実際は女中といっしょでした。

ディナにとってお城の生活はけっして楽しいものではありませんでした。何もかも分からないことだらけで、先生の侍女には怒られてばかりいましたし、女中たちからはろくに仕事も出来ないくせに身分ばかり上であることを恨まれて何かと意地悪をされました。

ある時、手の空いたディナに意地悪な女中たちが寄ってきました。

「あなたは姫様のお気に入りなんだからきれいにお化粧しなくてはならないわ」

女中たちにはごく薄い化粧しか許されていなかったので、その点でもディナは羨ましがられ、嫉妬されていました。

女中たちはディナを鏡台の前に座らせると、好き勝手にお化粧を始めました。そうして鏡に映ったディナを見て大笑いしました。

「さあ、これでますます姫様に気に入られるわ！」

女たちの楽しそうな笑い声を聞いてオーロラ姫がやってきました。

「なにがそんなに面白いの？」

オーロラ姫はディナの顔を見てびっくりしました。

ディナはまるで道化のようなひどい化粧をされていたのです。

「あなたたち、いったいどういうつもりなの！？」
「ちょっとした冗談ですわ・・・」
女中は慌てて言い訳しましたが、オーロラ姫の怒りは治まりません。
「こんなひどいことをして冗談になんてなるものですか！」
すると、オーロラ姫の左手の指輪がギラリと光って、女中たちは真っ青になって悲鳴を上げて逃げ出しました。
残されたオーロラ姫はショックを受けて呆然と立ち尽くしました。自分がひどく恐れられていることを思い知ったのです。
ディナはひれ伏して謝りました。
「私がいけないのです。私が身分不相応な立場を望んだばかりに姫様のお心を傷つけてしまいました。どうぞ私を追放するなりなんなりなさってください」
ディナはポロポロ涙をこぼしていました。
オーロラ姫はディナの手を取って起きあがらせました。
「あなたにまで恐れられたらわたしはすっかり話し相手がいなくなってしまうわ。わたしを気の毒に思うならどうか本当のお友だちになってちょうだい」
オーロラ姫はディナの顔を拭いて、改めてきれいにお化粧をしてあげました。すると、ディナは見違えるように美しい乙女に変身して、オーロラ姫もびっくりしました。
「まあ、わたしよりよっぽどお姫様っぽいわ！」
ディナも鏡の中の自分に驚いて、思わず微笑みました。
オーロラ姫は考えました。
「ねえ、ディナは何か得意なことってない？」
「そうですわね・・・。編み物なら少々・・・」
オーロラ姫は目を輝かせて言いました。
「それだわ！　あなたは今日からわたしの編み物の先生よ！　あなたがわたしに編み物を教えて、代わりにわたしがあなたに行儀作法やお勉強を教えるわ！」

オーロラ姫はディナに教師にふさわしい立派なドレスを着せました。
見違えるように美しくなったディナにもう誰も意地悪をしようなんて思わなくなりました。
しかし王妃様はしょせん田舎娘のディナを姫の教師にするなど反対しました。しかし、その王妃様さえもディナの刺繍の腕前を見て目を見張りました。
ディナは針のように細い編み棒を操って信じられないような複雑で優雅な模様のレース刺繍を易々と編み上げたのです。
「これは百年も前に技術の途絶えてしまったダイアナ刺繍ではありませんか！　いったいどうしてあなたがこの刺繍を知っているのです？」
「私の祖母が若い頃恋人の職人から習ったそうです。残念ながらその方は事故でお亡くなりになったそうですけれど」
今や伝説となってしまったダイアナ刺繍。確かにその最後の名人は男性であったといわれています。
「あなたのおばあさまはどうしていらっしゃるの？」
「祖母は数年前に亡くなりました。父も母も昨年病気で相次ぎ・・・」
王妃様はおばあさまの死を大変残念がりました。オーロラ姫も独りぼっちになってしまったディナに大変同情しました。
王妃様はオーロラ姫がディナに編み物を習うことに賛成し、ご自分までいっしょに習おうかと興味を示しましたが、ダイアナ刺繍のあまりの複雑さ、細かさに、すぐに諦めてしまいました。
ユリアもちょっと覗いてみて、やっぱりすぐに興味をなくしてしまいました。
「そんなもの、魔法を使えば簡単に作れるわ」
ユリアは糸に魔法を掛けて綺麗な刺繍になるように命じましたが、結果は、糸が絡まり合い、引っ張り合い、ぐちゃぐちゃになってしまった。
オーロラ姫はユリアとディナの仲が悪くなってしまうのではない

かと心配しましたが、侍女見習いという重圧から解放されたディナは本来の明るさを取り戻し、もともと自由気ままな妖精であるユリアとは話も合い、二人はとても仲良くなりました。オーロラ姫はほっとして、三人はとても楽しい毎日を送るようになりました。

ディナはオーロラ姫に行儀作法を教えられ、みるみる立派なレディに成長していきました。

「これなら伯爵様もルピネー様との婚約を認めてくださるわ！」

オーロラ姫はディナの成長ぶりにとても満足していました。

でも、実はオーロラ姫はルピネーのことはあまり良く思っていませんでした。指輪の呪いを掛けられたことよりも、あのまるで表情のないガラスのような顔がちょっぴり気味悪く思われたのです。それはユリアも同様で、なにしろルピネーはお城の暗い取調室に監禁されている間もちっとも怯えたような様子を見せなかったのです。

「ねえ、なんでディナはルピネー様のことをそんなに好きなの？」

オーロラ姫は思わずそう訊いてしまいました。

ディナは頬を染めて答えました。

「だって、あの人はとても美しいし、優しいし、思慮深いし、何より、わたしのことを真剣に愛してくれているのだもの・・・・」

オーロラ姫はユリアと顔を見合わせて思わず苦笑しました。ディナがあんまりうっとりして恋する乙女の顔になってしまっていたからです。

ディナは二人の様子に心外そうに抗議しました。

「そういうオーロラ姫にだってシルバー王子という素晴らしいお相手がいらっしゃるじゃないですか？」

シルバー王子とオーロラ姫の仲の良さはいわば国民全ての公認するところでしたから、実はディナも心密かにシルバー王子の訪ねていらっしゃるのを若い娘の好奇心で楽しみに待っているのでした。

今度はオーロラ姫が頬を染めました。ディナはユリアと顔を見合わせ、三人は仲良く笑いました。

シルバー王子が訪ねてきました。
王子はカラベラス捜索の旅に出ていましたが、残念ながら魔女を捕まえたという報告はありませんでした。
しかし王子はずいぶんと上機嫌でオーロラ姫を見つけるとニコニコ笑って言いました。
「ちょっと面白いものを手に入れたのです。今度はけっして危険なものではありませんから姫にお贈りしましょう」
王子は小箱を取り出しオーロラ姫に差し出しました。
オーロラ姫はちょっぴりドキドキしながら、王子の笑顔に促されて小箱を開きました。
小箱に入っていたのは淡い紅色のカメオでした。
若い女性の横顔が彫られています。
「それがいったいどこにあったと思います？」
王子は得意満面で言いました。
「なんと大きな人食い狼の腹の中から出てきたのですよ！」
オーロラ姫はまあと驚いて訊きました。
「人を食べてしまいましたの？」
「大丈夫、ちゃんとお腹の中から救出しましたから」
人を疑うことのないオーロラ姫もさすがにこれは王子のホラ話だろうと信じませんでした。王子はずいぶん心外に思ってユリアに助けを求めましたが、ユリアはいたずらっぽくニヤニヤ笑っているだけでした。
「それはカンパニアを興したジェンヌ夫人の肖像だそうですよ」
カンパニアとはロヴィーク第一の商業都市で、およそ百年前にこの街を興したジェンヌ夫人はロヴィークで知らぬ者はいない伝説的な人でした。
なるほどと感心してカメオを眺めていたオーロラ姫はあら？と気づいてディナを呼びました。

「ねえ、この女性あなたに似ていない？」
オーロラ姫に呼ばれてカメオを見せられたディナはさっと顔色が変わるほど驚き、よほどおそれおおいと思ったのか、
「いいえ、私ではありませんわ」
と、当たり前のことを言いました。
オーロラ姫はディナの横顔とカメオの女性を見比べて、王子にねっ？と視線を送りました。
王子も両者を見比べてなるほど似ていると頷きました。
実は王子は部屋に控えるこの美しい女性を誰だろうかと密かに胸を躍らせていたのでした。
オーロラ姫は両者をお互いに紹介し、二人は「初めまして。お会いできて光栄です」と挨拶しました。
「ねえ、すばらしいわ！」
オーロラ姫は目を輝かせてディナの手を取りました。
「これだけそっくりなのですもの、あなたはどこかでジェンヌ夫人と血のつながりがあるのよ。これだけ高名な貴族と血のつながりがあるとすれば、あなたはルピネー様の婚約者としてこれ以上なくふさわしいわ！」
ジェンヌ夫人は残念ながら子孫を残していませんでしたから、これが本当ならそれはたしかにすばらしいことです。
オーロラ姫はユリアにどうかしら？と尋ねました。
ユリアはそうねえと考えて、
「わたしには分からないけれど、妖精の国には誰か知っている人がいるかもね」
と答えました。
長命な妖精のことですから、百年程度の昔ならいくらでも知っている者がいるでしょう。
オーロラ姫は考えて王子に尋ねました。
「このせっかくの贈り物ですけれど、ディナに差し上げてもいいかしら？」

オーロラ姫はディナをすっかり伝説の貴人の子孫と思いこんでしまっているようでした。
王子も素直に頷き、言いました。
「いいでしょう。姫がそれがふさわしいと思うなら」
そう言いながら王子が実はちょっぴり残念そうなのをユリアだけは見逃しませんでした。
オーロラ姫にカメオを首にかけてもらったディナはとても感激し嬉しそうに手に包み、慈しみました。

ルピネーが伯爵からの贈り物を携えてお城を訪れました。
王様へは遙か東方の国の純白の壺を。
王妃様へはオーロラ姫をモデルに彫られた黄金のドレスをまとった大理石像を。
オーロラ姫へはダイヤモンドを贅沢にあしらった輝く銀色の靴を。
ユリアへはラピスの高原にしか咲かない珍しい花の蜂蜜を。
贈り物のどれもがそれぞれの好みにぴったり合っていたので皆伯爵のセンスの良さに感激して大いに満足しました。
オーロラ姫はディナへの贈り物がないのではないかと心配しましたが、ルピネーはちゃんとディナへの贈り物を用意していました。
ルピネーは王様王妃様への挨拶を済ませると、時間を作ってディナと二人きりで会いました。
ルピネーはとびきり大きなエメラルドの首飾りをディナに贈りました。
ディナはあんまり立派な贈り物にちょっぴり気後れしてしまいました。
贈り物ばかりでなく、素晴らしく豪華な貴族の服を身にまとったルピネーは、本物の王子様のように光り輝いて見えました。
いえ、今やルピネーは本物以上に本物の王子様なのでした。
ディナはエメラルドの首飾りをした自分を鏡で見てみましたが、

切ないため息しか出ませんでした。

ルピネーは改めて王様に国を訪れた理由を話しました。

「父は私がオーロラ姫の呪いの指輪を作ってしまったことを大変申し訳なく思っています。私も自分の責任を強く感じております。そこで父が申すには指輪を作った張本人であるおまえなら指輪を外すこともかなうのではないか、いや、ぜひ外して差し上げなくてはならない、と。私も、姫のために出来る限りのことはさせていただきたいと思っております。もしお許し願えるなら、このまましばらく滞在し、姫のために力を尽くしたいと思うのですが、いかがでしょうか？」

そうしてルピネーは従者に謝罪と滞在の費用の意味合いで大量の金塊を運ばせました。

王様は驚き、感激し、ルピネーの滞在を快く承知しました。

ルピネーにはあれ以来名付け親であるサファイアの精がくっついていました。

サファイアの精はルピネーに祝福として「成功者の栄光」を贈ったくらいですから、ルピネーの立派な変身ぶりには大いに満足していました。

ユリアは面白くありません。

「どうやら伯爵はルピネーをオーロラ姫のお婿さんにしたがっているようね」

「ええ、その通りよ」

サファイアの精は誇らしげに胸を張りました。

「わたしのルピネーこそ美しいオーロラ姫のお婿さんにふさわしいわ！」

「冗談じゃないわよ！」

ユリアは本気になって怒りました。

「あなただって黒魔女の呪いのことは知っているでしょう？　オー

ロラのお婿さんになる人は真実の愛を持った人でなくてはならないのよ！」
サファイアの精も怒って言い返しました。
「なによ、わたしのルピネーには真実の愛の心がないって言うの？」
「ルピネーにはディナという許嫁がいるじゃない」
「あんな田舎者、ルピネーにはふさわしくないわ。彼女は、あくまでマリオンの許嫁よ！」
「なんですってえ！」
ユリアは妖精の姿に変身し、二人の妖精はとうとう火花を散らしてけんかを始めてしまいました。
びゅんびゅん飛び回っての大げんかに城の人たちは大迷惑ですが、なにしろ相手が妖精なものですから止めようがありません。
「二人ともいい加減にしなさい！」
けんかを止めたのは、なんと妖精の国からやってきたダイヤモンドの精でした。
彼女は魔法を跳ね返す力があるので二人とも彼女には逆らえません。
ダイヤモンドの精はシルバー王子といっしょにお城に来ていました。彼女はシルバー王子の名付け親なのです。
「サファイアの精」
ダイヤモンドの精はサファイアの精を睨みつけました。
「女王様の命令よ。さっさと妖精の国に帰ってきなさい」
「そんなあ！」
サファイアの精はプンプン怒って抗議しました。
「だってリラの精ばかり、ずるいじゃない！？」
ちょっぴりお姉さんのダイヤモンドの精は困ったように言いました。
「女王様は妖精があまり人間に近しくなることを好まれないのよ」
それでもサファイアの精はだだをこねました。
「いやよ！　わたしももっと人間の世界で遊んでいたい！」

リラの精はいい気味だと意地悪に笑いました。
「ダイアン姉さん、さっさとこのうるさい妹を連れて帰ってちょうだい」
ダイヤモンドの精はすがるように見つめるサファイアの精を見てため息をつきました。
「わたしだってこっちで遊んでいたいわ。後で女王様にしかられる覚悟があるならもうしばらくこっちにいてもいいわよ。その時は、わたしもいっしょに謝ってあげるから」
サファイアの精は大喜びです。
「わたしもね、あなたを羨ましく思っていたのよ」
ダイヤモンドの精に言われてリラの精も仕方なく微笑みました。
「その代わり」
ダイヤモンドの精はサファイアの精に念を押しました。
「わたしはシルバー王子の味方ですからね。二人の恋の邪魔をしたらただじゃおきませんよ」

オーロラ姫はシルバー王子が訪ねてきてくれたことを喜びながら、友人のディナのことが気になって仕方ありませんでした。せっかくルピネーが来ているというのに、二人は妙によそよそしく、ろくに話もしていないようなのです。
オーロラ姫はシルバー王子と相談して、それぞれルピネーとディナに話をしてみることにしました。

まずオーロラ姫がルピネーと話してみました。
ルピネーは言いました。
「もちろんわたしはディナを愛しています。しかし、わたしの父はわたしにあなたと結婚することを望んでいます」
オーロラ姫はびっくりして思わず目を見開きました。
ルピネーは悲しそうに微笑みました。
「わたしにはあなたに指輪の呪いを掛けてしまった負い目がある。

その呪いを解くためならばわたしはなんでもするでしょう。それはあなたを愛するということとも、ディナを裏切るということとも別のことです。一方、こうも思うのです。その指輪を外すのはきっとわたしではない。あなたを心から愛し、また、あなたも心から愛する誰か。いずれ、時がくれば分かるでしょう。結局、わたしはあなたのために何も出来ない。ただ見守るだけ。父上の期待には応えられそうもない」

シルバー王子はディナに話しかけました。

王子は一度ディナに会っていましたが、それはオーロラ姫やユリアといっしょの時で、二人きりで会うのは初めてでした。

王子はディナの悩ましい横顔にドキドキしました。

ディナはちらりと王子を見ると悲しそうに言いました。

「わたしには妖精にもらった名前はありません。妖精が訪れるのはお金持ちの貴族の子だけ。わたしのように貧しい家の子に妖精が訪れることはまずありません。貴族と平民には生まれたときから大きな運命の隔たりがあるのですわ」

王子は内心どぎまぎしながら、力強く言いました。

「心から強く願えばきっと妖精は訪れてくれる。リラの精だって君を手助けしてくれるだろう。きっと君の願いは叶うよ」

王子の励ましにもディナはため息をつくばかりでした。

「でも妖精の祝福の贈り物は一人にしかできないのでしょう？　リラの精もわたしには祝福の贈り物はしてくれないわ」

「そうかも知れないけれど・・・」

王子はすっかり困ってしまいました。

「大丈夫だよ、たとえ妖精の祝福がなくったって、君にはオーロラ姫やわたしがいるじゃないか。わたしたちは友だちだ。喜んで君の味方をするよ」

ディナは王子の温かい励ましにようやく微笑みを返しました。

第6章　初めての旅行

王子はお城を訪れると様々なところへ冒険した話を聞かせてくれました。
オーロラ姫を楽しませるために多少の誇張も混じっていましたが、生まれてからほとんどお城を離れたことのないオーロラ姫は、よほどの大ボラでもない限りは、少しも疑わず目をキラキラさせて聞き入りました。
オーロラ姫のお気に入りは人魚の住むという青い湖の話でした。王子が噂に聞く人魚というものと一度会ってみたくて何日も泊まり込んでボートを出して探すのですが、結局見つからなかったという落ちのつくお話でした。
「ねえ、人魚って本当にいるの？」
「さあ？」
ユリアも妖精たちも知りませんでした。
「ああ、行ってみたいわ・・・」
オーロラ姫は青い湖に遊ぶ人魚の姿を想像してうっとりしました。
ユリアが思いついて言いました。
「それじゃあ、行ってみない？」

「とんでもない！」
ユリアと王子から旅行の計画を聞いて王様と王妃様は猛反対しました。
王子は申し訳なさそうに言いました。
「実はその湖というのは我が国の外れの森にある避暑地でありまして、きちんとした別荘も建ち、けっして危険な所ではないのです」
ユリアはなーんだと呆れかえりましたが、その方が却って姫の旅行には差し支えありません。
くっついてきた二人の妖精たちも胸を張って旅の安全を請け負い

ました。
「わたしと王子がいればお姫様が危険な目に遭う事なんてあり得ませんわ」
ダイヤモンドの精が言うと、サファイアの精も負けじと言いました。
「もちろんわたしとルピネーだって行きますわ。……危険なことは二人にお任せしますけど」
王様の気持ちも揺れました。もちろん今もシルバー王子が姫の花婿の第一候補であることに違いありませんでしたが、大金持ちで実力者のラズベリー伯爵家との婚姻もひどく魅力的なのでした。
妖精たちにさんざん迫られて、王様もとうとう姫の旅行を許可しました。

旅行の許可が下りたことを聞かされてオーロラ姫は信じられないほど感激しました。
もう期待で胸がいっぱいです。あれこれ旅行の支度をしながら、出発までの間毎日、明日という日が来るのが待ち遠しくてなりませんでした。

そしていよいよ出発の日となりました。
メンバーはシルバー王子とオーロラ姫、ルピネーとディナ、ユリアと二人の妖精、それにお供の男女が数名付きました。
よく晴れた日でした。
オーロラ姫がお城の外に出ることは滅多にありませんでしたし、シルバー王子や妖精たちがいっしょでしたから、街の沿道にはお見送りの市民がいっぱいに集まり、さながらお祭りのパレードのようでした。
オーロラ姫は馬車の中から上機嫌で市民たちに手を振ってお答えになりました。
一行はお祭り騒ぎの街を抜け、広大な田園地帯を進んでいきまし

た。
道行きはオーロラ姫に配慮してゆっくり進んでいき、景色の良い所や豪農の屋敷に立ち寄って幾度も休憩を取りました。
オーロラ姫は四頭立ての大きな馬車に乗っていましたが、さすがに全員乗っては窮屈なので、ルピネーの馬車と分かれて乗っていました。そして休憩するごとにメンバーを交代して、楽しくおしゃべりに興じて、ゆっくりした道程も退屈することはありませんでした。
初めての旅行にすっかり気分の浮き浮きしたオーロラ姫は、ルピネーといっしょになったときにラピス国の様子について尋ねました。
「ラピスの街はまるで巨人の国です」
ルピネーは朗(ほが)らかに笑って答えました。
「街の規模もそうですが、建物の一つ一つがとにかく大きく、ラピスの人々は普通の二倍くらいの背があるのではないかと心配しましたが、住んでいるのはわたしたちと同じ普通の人々でした」
「まあ、そんなに大きいの？」
オーロラ姫は目を輝かせて聞き入りました。
「道並みに小さなお城がずうっと続いているような感じです。しかし建物が大きすぎるのも考え物で、下の道がすっかり暗くなってしまうのです。そこで建物の壁はピカピカの大理石を貼ったり、漆喰は赤や青や緑の明るい綺麗な色を塗って飾り立てています。まるでおとぎの国のような美しさですよ」
オーロラ姫はおとぎ話の巨人の国に迷い込んだ姿を想像して思わず言いました。
「面白そうね。一度行ってみたいわ」
「ええ、いずれぜひ、王子といっしょにお越しください」
その時馬車には二人の妖精たちがいっしょに乗っていましたが、サファイアの精は大得意で、ダイヤモンドの精は自慢されているようで面白くありません。
ダイヤモンドの精は意地悪に言いました。
「そうは言うけれど、あなたは目がすごく悪かったんじゃないの？

そんなにはっきり街の様子が見えるのかしら？」
ダイヤモンドの精は言ってしまってから、さすがに失礼な発言だったと後悔しました。
ルピネーは静かに答えました。
「その通りです。街の様子はラピスの人たちが親切に教えてくれました。わたしの目には、こうして向かい合ってもオーロラ姫の影しか映っていません。わたしがはっきり知っている女性の顔というのはディナだけです」
オーロラ姫はルピネーの真っ青な瞳に見つめられて胸がドキリと高鳴りました。こんなにまっすぐ見つめられているのに、自分の顔が見えていないなど、とても不思議な感じがしました。

ルピネーの馬車にいっしょに乗っている王子にディナも王子のルービッシュ国について尋ねました。ただ、ディナはオーロラ姫と違っていくらかルービッシュ国について知っていました。
「五年ほど前ルービッシュ国の畑が害虫の大被害にあったことがありますでしょう？　野菜が高く売れるというので荷馬車に積んで父と二人でルービッシュの町に売りに行ったことがあります」
ディナはクリームとジャムのたっぷり乗ったクッキーが美味しかったなど、子どもの頃の無邪気な思い出を楽しそうに話しました。
「それはデロベルの町ではありませんか？　あそこのブドウはワインよりジャムに適しているのです。風車の立った急な三角屋根の家を覚えていませんか？」
「ええ、紫と赤の変わった瓦の屋根のお家ですね？」
王子は嬉しそうに頷きました。
「そこがわたしの乳母の実家なのです。父親が芸術肌の大工で、変わった家ばかり作るのでちっとも注文が来ないのだそうです。実はわたしもそのクッキーが大好きで、乳母によく焼いてもらったものです」
ルービッシュは大きな国ではありませんでしたが、豊かな自然に

恵まれた平和な国でした。王子は思いがけず楽しい少年時代を思い出し、幸福な気持ちに満たされました。

オーロラ姫一行は夕刻になると早々に近くの豪農の館に宿を取りましたが、ずいぶんゆっくり来てしまったせいでそこは予定の宿ではなく、主はお姫様をお泊めするというので大変恐縮して屋敷中大騒ぎになりました。

オーロラ姫は一番高い屋根裏部屋に上り、窓から夕日が平原を真っ赤に染める様を見てとても感激しました。

その夜オーロラ姫は粗末な寝床ながらも、ぐっすり、とても気持ちよく眠ることが出来ました。

五日間ロヴィークの領土を旅し森の手前で宿を取り、翌日早朝に森に入ると、夕方暗くなる前にとうとう目的の湖に到着することが出来ました。

湖は木々の影を黒々と湖面に映し、ちょっと不気味な感じを漂わせていました。

しかし湖にせり出すように建った王子の別荘の小城はまるで白鳥のように美しく、今か今かとオーロラ姫の到着を待っていた王子の使用人たちの温かい歓迎を受け、さすがにちょっぴり疲れ気味のオーロラ姫はほっとしてくつろぐことが出来ました。

その夜はみんなもやっぱり疲れ気味だったので、明日からのお楽しみに備えて早めに寝ることにしました。

皆が寝静まった深夜、ユリアは突然、冷たい、暗い気配を感じて飛び起きました。いっしょの部屋に寝ているオーロラ姫は無事です。しかし普通ではない魔力の気配にユリアは緊張して、妖精の姿に戻ると、二人の妖精たちも起こして気配の元をたどっていきました。

たどり着いたのはディナの寝室でした。

リラの精は魔法で鍵を外すと、そうっとドアを開けました。

黒い影が枕元に立ってじいっとディナの寝顔を覗き込んでいました。
「カラベラス！」
妖精たちは殺気立って黒い影を包囲しました。
なんとなく落ち着かない気配に王子も起き出してきました。
リラの精は黒い影の正体を見極めるために指先から光の粉を振りかけました。
光の中に浮かび上がったのは、なんと、妖精仲間の合わせ鏡の精でした。
「誰がカラベラスだって？　おかしな気配がすると思ったらおまえたちかい」
合わせ鏡の精は三人を見渡してあざ笑いました。
「ベラ」
合わせ鏡の精は「合わせ鏡」という面倒な呼び名を嫌って、自らベラと名乗っていました。
三人が彼女を黒魔女と勘違いしたのも道理で、鏡の精一族は数少ない人間の姿に変身できる妖精たちだったのです。
もっとも、それは見かけだけの影に過ぎませんが。
「なぜあなたがここにいるの？」
ダイヤモンドとサファイアの精は、嫌な相手に会ってしまったと、あからさまに顔をしかめました。ひねくれ者のベラは妖精たちの間の嫌われ者でした。
リラの精もお姉さんの鏡の精とは仲良しで、彼女の魔法を借りてよく鏡からオーロラ姫の暮らしぶりを覗いていましたが、妹のベラとはほとんど口をきいたことがありませんでした。
ベラは仲間の嫌な顔なんて全然気にした様子もなく言いました。
「あたしはこの娘の夢に呼ばれてやってきたのさ」
ベラには人の夢の中に入っていける能力がありました。
妖精たちに注目されてディナが目を覚ましました。
ディナはベラを見るとびっくりしました。

「おまえは妖精の祝福を強く願っているようだね。女王様の命令でその人間が生きている限り一人の妖精は一人の人間にしか祝福を与えてはいけないことになっているんだ。あいにく今妖精の国で人間に祝福を与えていないのはあたしくらいのものでね、あたしでよければ祝福してやってもいいけれど、どうする、受けるかい？」

妖精たちは口々に、止しなさい、ろくなことにならないわよと、ディナを止めました。

ディナはベラをじいっと見つめて言いました。

「お願いします、どうぞわたしに祝福をお与えください」

ベラはニヤリと笑って、ディナの額に口づけすると、言いました。

「祝福する。あたしが贈るのは、偽りを真実に変える心だ」

偽りを真実に変える心、とは、いったいどういう意味でしょう？

妖精たちは、ほーら言わないことではないと、肩をすくめ、ため息をつきました。

「名前は・・・、面倒だから自分で好きな名前を名乗りな」

ベラはハハハと笑うと、無責任に夢の世界に消えていきました。

「偽りを真実に変える心・・・」

ディナは悩ましく考え込みました。

第7章　湖の出来事

湖に着いてからの十日間、オーロラ姫はとても楽しくくつろいだ毎日を過ごしました。

そしてとうとう明日はお城に帰る最後の滞在日となりました。

朝食を終えるとオーロラ姫は王子といっしょに湖の周りの散歩道を歩きました。これが最後のお散歩になるかと思うと名残惜しくてなりません。

昼の光を受けた湖は王子がお話に話してくれたとおり青く透き通り、人魚が泳ぎ回っていても不思議ではない神秘さを漂わせていました。

これが最後かと思うと、オーロラ姫はついわがままになって王子とユリアにおねだりをしました。

昼食を取ると、オーロラ姫のたってのお願いで、みんなでボート遊びをすることになりました。

二艘のボートが用意され、それぞれ、オーロラ姫とユリアと王子、ディナとルピネーが組になって乗り込みました。王子は自分でオールを漕ぎましたが、ディナとルピネーには腕っ節の強い若者が漕ぎ手に付きました。

温かい陽気が続いていましたから、万が一湖に落ちても凍え死ぬということは考えられませんでしたが、湖の周りには泳ぎの達者な若者たちが配備され、お城の一室には暖炉に火がくべられ、温められていました。

二艘のボートはオーロラ姫の求めに応じて湖の中央に漕ぎ出していきました。

オーロラ姫はもちろん泳いだことなど一度もありませんでした。もしボートがひっくり返ったりしたらと想像すると背筋がヒヤリとしましたが、そのスリルがまたゾクゾクする楽しさでした。実際のところ、泳ぎの得意な王子となんでも出来る妖精のユリアが付いて

いてくれるのですから、自分が危険な目に遭うなんてちっとも思っていませんでした。
湖の上で感じる風は格別気持ちのよいものでした。
オーロラ姫が手を振ると、もう一艘のボートに乗ったディナが水面に滑らせていた手を上げて笑顔で答えました。
湖の中央でボートが止まると、オーロラ姫も水面をサラサラ撫で、湖を覗き込みました。
湖はどこまでも青く透き通っていくようでした。
「オーロラ、落ちないように気を付けるのよ」
ユリアに注意されてオーロラ姫は水面に映る自分の姿に目をやりました。
おかしなことに、鏡を見ているときはなんとも思わない自分の顔が、こうして青い水鏡に映してみると、なんとも綺麗で、魅力的に見えます。
「なんて美しいのかしら……」
オーロラ姫は思わず自分の顔に見惚れてしまいました。
すると、湖の中のオーロラ姫がニッコリ笑って、ボートの上のオーロラ姫を手招きました。
オーロラ姫は誘われるまま、スルリと湖に飛び込んでしまいました。
「オーロラ！」
ユリアが悲鳴を上げ、王子はすぐさま飛び込もうとしました。その途端、真っ青に澄んでいた湖の水が真っ黒になってしまいました。
王子は飛び込もうとした体勢のまま思わず躊躇しました。
ザバンと水しぶきを上げてもう一艘のボートからルピネーが湖に飛び込みました。
王子も続いて飛び込もうとしましたが、ユリアが止めました。
「今この湖は黒い魔力に支配されているわ。飛び込んだらどうなるか分からないわ。わたしが行くからあなたは待っていて」
ユリアは妖精の姿になって湖に飛び込みました。

ダイアモンドとサファイアの精は慌てふためいて湖の上をグルグル飛び回るだけでした。
周囲に配備された若者たちが次々湖に飛び込みましたが、すぐに悲鳴を上げて岸に逃げ帰りました。いったん湖面の下に潜ると、そこはいっさいの光を通さない真の闇で、上も下もまったく分からず、自分が闇に消え入ってしまうような恐ろしい感覚に支配されてしまうのでした。
王子は真っ黒な湖面を見つめてイライラしました。
何度となく飛び込んでしまおうかとしたのですが、その度にディナに、危険だからやめて、と止められました。それでも王子が飛び込みたそうにすると、
「王子が飛び込んだらわたしも飛び込みます！」
と、涙目で強く訴えられてしまいました。
王子は飛び込むのを断念して、湖を見つめ、ひたすら姫の無事を祈りました。

湖の中でリラの精は必死にオーロラ姫の姿を探しました。しかし湖の闇はリラの精の目をもってしても見通すことは出来ず、探し回る内にリラの精自身上も下も分からなくなってしまう有様で、絶望的な気持ちになってしまいました。
湖中に漂うオーロラ姫も我に返ったときには真の闇で、息が苦しく、涙を流して死を覚悟しました。
意識が遠のきかけたとき、誰かにしっかり抱きとめられ、口移しに空気を与えられました。
オーロラ姫はそれがルピネーであるのを知りました。
ルピネーはオーロラ姫の左手を取り、耳元に口を寄せ、一言言いました。
「光」
ルピネーの体からふっと力が抜け、ルピネーはオーロラ姫から離れてどこかに漂っていきました。

オーロラ姫は辺りに手を伸ばしてルピネーを捜しましたが、見つけることは出来ませんでした。
オーロラ姫が左手を胸の前に掲げて、
「光よ、光よ」
と念じると、指輪は金色に光りだし、突然目の前の闇に向かって鋭い稲妻を迸(ほとばし)らせました。
稲妻は恐ろしい顔をした何物かを打ち据え、一瞬闇に浮かび上がったその顔を見たオーロラ姫はふっと気を失ってしまいました。

湖が突然元通り青く澄み渡りました。
ボートの上の王子はすぐ近くの水中に漂うオーロラ姫を見つけて、飛び込んですくい上げました。
名前を呼ばれるとオーロラ姫は咳き込みながらすぐに目を覚ましました。
心配そうに顔を覗き込む王子を押しのけ、オーロラ姫はルピネーを捜し求めました。
リラの精が湖底に沈んでいくルピネーを見つけてボートに引き上げました。
ルピネーの体はすっかり冷たくなっていました。ディナが胸を押し、口から息を吹き込んでも息を吹き返しませんでした。
オーロラ姫は涙を流し、声を振り絞ってルピネーの名を呼び続けました。
湖面には、この湖の主でしょうか、人の身の丈ほどもある大ナマズが白い腹を上にして浮いていました。

お城の暖炉の部屋に運ばれたルピネーは妖精たちの魔法によって無理やり心臓を動かされ、なんとか息を吹き返しました。しかし相変わらず意識は戻らず、命の危険な状態がずっと続きました。
オーロラ姫は心配で心配で、食事も取らず、床にもつこうとせず、リラの精が内緒で眠り薬を飲ませてやっと眠らせました。

ルピネーはディナが付きっきりで看病していました。いくら暖炉を熱く燃やしても、芯まで凍えきったルピネーの体はいつまでも温まらず、ディナは薄着になってぴったり体を寄せてルピネーを温め続けました。

目を覚ましたオーロラ姫はディナがそうしてルピネーの看病をしていることを知り、ちょっとしたショックを受けました。

命がけで自分を救ってくれたルピネーに何もしてあげられないのかと、すごく惨めな気持ちになりました。

七日たってもルピネーの意識は戻りませんでした。

医者はルピネーの弱々しい心音を聞いて、駄目かもしれないと首を振りました。

看病に疲れ切ったディナも半ば諦めて悲嘆の涙を流しました。

お見舞いに訪れたオーロラ姫は死人のように青白いルピネーの顔を見て呆然とし、ポロリと涙をこぼしました。

「ごめんなさい、わたしのために‥‥。ごめんなさい‥‥‥」

枕元にひざまずいて額に掛かる髪の毛を撫で上げました。

ほんの微かですが、熱が感じられました。

オーロラ姫はわき上がる感情を抑えきれずにルピネーに叫びました。

「目を覚まして！　あなたは生きている！　生きているわ！」

指輪がバチンと火花を散らし、オーロラ姫は悲鳴を上げて後ろに倒れました。

うっ、とルピネーがうめき声を上げ、うっすら目を開きました。

ルピネーはオーロラ姫を認めて微笑みました。

「ああ、ご無事だったのですね」

オーロラ姫はその顔を見て、思わず抱きつき、わあっと声を上げて泣きました。

オーロラ姫は二月近く湖のお城に滞在し、その間に季節はすっかり冬となり、雪が深く積もっていきました。

王様王妃様から帰国を促す手紙が何通も届きましたが、オーロラ姫は頑として帰ろうとしませんでした。
王子は公務もあっていつまでも別荘にとどまるわけには行かず、慌ただしく王都と湖を往ったり来たりしました。
ルピネーが目覚めてからは看病に疲れたディナに代わってオーロラ姫が積極的にルピネーの世話を勤めました。
ルピネーは日に日に元気になっていき、オーロラ姫はようやく明るい笑顔を浮かべられるようになりました。

しかし、そんなオーロラ姫を見守るユリアには、一つ、大きなどす黒い疑惑が浮かんでいました。
ユリアには、あの大ナマズにあのような強い魔力があったとはどうしても思えないのでした。
あの怪異の犯人は、やはり、黒魔女カラベラス以外には考えられないのでした。
しかし果たしてどこからカラベラスが魔力を用いたのか、それをユリアは疑っているのでした。

ルピネーがすっかり元気になり、ようやく、オーロラ姫はお城に帰ることになりました。
シルバー王子も同行しましたが、責任を感じてか、馬車には乗らず、ずうっと馬に跨っていました。

街に着くと、またも市民の熱狂的な歓迎に会いました。
しかし、今度の主役はオーロラ姫の危機を命がけで救ったルピネーでした。
ルピネーはオーロラ姫に促されていっしょに手を振って市民の歓迎に応えました。
お城に到着すると、王様王妃様は駆け寄って姫の無事を確認しま

した。お二人はオーロラ姫の元気な様子を確かめると、今度はルピネーの手を取って姫を救ってくれたお礼をこれでもかこれでもかと繰り返しました。
ルピネーはすっかり国民的な英雄になっていました。

シルバー王子は王様王妃様にオーロラ姫を危険な目に遭わせてしまった謝罪をすると、一人寂しく帰国の途に付こうとしました。
一人でひっそり去ろうと思っていたのですが、思いがけず、ディナが見送りに来てくれました。
ディナは王子の前にひれ伏し、謝罪しました。
「申し訳ありませんでした。私が出過ぎたことを申したばかりに王子を苦しめることになってしまいました」
ディナはボートの上で王子を引き止めたことを謝っているのです。市民の中には湖に飛び込むのを躊躇した王子を意気地なし呼ばわりする心ない者がいるのでした。
「あなたは間違ってはいない。わたしが飛び込んでも何も出来ずに溺れるだけだっただろう。ただ・・・」
王子はディナの手を取って起きあがらせて訊きました。
「どうして、ああまでわたしを引き止めたのです？」
「それはもちろん、王子にもしものことがあっては大変だと・・・」
ディナは慌てて顔をうつむかせて謝りました。
「まさかそれがこれほど王子を苦しめることになろうとは思わなかったのです。それでも、私は王子がこうしてご無事であることを嬉しく思います。オーロラ姫だって・・・、きっと、そうお思いですわ・・・・」
王子は頷きましたが、声にはなりませんでした。
立ち去ろうとする王子にディナは尋ねました。
「またいらしてくださいますわよね？」
王子は微笑んで答えました。
「ええ、もちろんです」

第8章　リラの精の冒険

ユリアもオーロラ姫を危険な目に遭わせてしまったことで落ち込んでいました。王様王妃様にもずいぶんしかられて、お城での立場もずいぶん悪くなってしまいました。

しかしユリアは落ち込んでいるばかりではありませんでした。

ダイアモンドの精は今度こそ女王様の命令通りサファイアの精を妖精の国に連れ帰ろうとしましたが、ユリアはそれを待たせました。

「わたしとしては本意ではないけれど、今オーロラ姫の心はルピネーに傾いているわ。カラベラスは今度はルピネーを狙ってくるかもしれない。サファイアの精にはカラベラスの魔力が及ばないようにルピネーを守ってもらわなければならないわ」

カラベラスが襲ってくるかもしれないと思ってサファイアの精は震え上がりましたが、ユリアに励まされてルピネーの元にとどまることにしました。

一方、ダイアモンドの精にはこっそりある依頼をしました。

「合わせ鏡の精を呼んでほしいの」

ダイアモンドの精は頭のいい人でしたから、ユリアの考えていることが分かっていました。

ユリアはルピネーを怪しいと睨んでいるのでした。

いかに普段から物がよく見えず、勘が鋭いとはいえ、妖精の自分でさえまったく見通せなかった湖の暗黒を普通の人間が見通せるとはどうしても思えないのでした。

ルピネーは何らかの形でカラベラスとつながっているに違いありません。

ダイアモンドの精はベラを呼ぶことを約束して妖精の国に帰っていきました。

果たして、その夜の夢の中にベラが現れました。

目を覚ましたユリアはこの黒い妖精をちょっぴり気味悪く思いながらも、ルピネーへの疑惑を話し、彼の夢を探ることを頼みました。
「女王様の誉れの高いリラの精がずいぶんと焼きが回ったものだね。人間の姿なんてしているから簡単に夢の世界をくぐってこれたよ。あのルピネーの坊やが怪しいだって？　あの坊やなら愛しいオーロラ姫の夢を見て幸せにぐっすり眠っていたよ」
「そんな！　ルピネーがオーロラ姫に恋しているって言うの！？」
ユリアは思い悩みました。
ベラはそんなユリアの心を見透かすようにニヤニヤ笑いました。
「あんたのかわいいオーロラ姫の夢も知りたいかい？」
ユリアはベラを睨みつけてきっぱり言いました。
「けっこうよ。人の夢を覗き歩くなんて、なんていやらしい人なの！」
ユリアは心を落ち着けてよく考えてみました。
「ベラ。あなたはあのルピネーが絶対に怪しくないって言い切れる？　相手はあのカラベラスなのよ。人の心は奥深いものだわ。表面的な夢にだまされているだけなんじゃないの？」
ベラはムッとしてユリアを睨み返しました。
「それじゃあ、どうしろって言うのさ？」
「そうね…。ルピネーの育ての親を調べてみましょうか。彼らなら何か知っているかもしれないわ」
ベラは面白くもなさそうに考えていましたが、やがて頷きました。
「まあ、いいさ。あの男がカラベラスの手先だったりしたら、このあたしがただじゃおかないさ」
ユリアはベラの憎々しげな顔を見て不思議に思って訊きました。
「カラベラスに何か恨みでもあるの？」
「魔女なんてどうでもいいさ。ディナが、マリオンの夢を見ていたのさ…」
ベラの怒った顔を見て、ユリアはちょっぴり彼女が好きになりました。

リラの精とベラは競争してルピネーの生まれた村に向かって飛びました。
リラの精は空を飛ぶのにかなり自信を持っていましたが、ベラも風を操る術に優れ、二人は互角のスピードで飛び、馬を駈けさせて丸一日かかる所をたったの二時間ほどで着いてしまいました。
そこはごく普通の農村で、集落には灯り一つなく静まりかえっていました。
ベラは眠っている村人たちの夢の中にルピネーの姿を送りました。ルピネーの育ての父母はすぐに反応し、簡単に二人の家を見つけることが出来ました。
二人が住んでいるのは村で一番大きな、新しい家でした。伯爵にいただいたお金でずいぶん豪勢に暮らしているようです。
早速家に忍び込もうとするリラの精をベラが止めました。
「なんかおかしいよ。夢の中にルピネーの姿が現れたときの二人の驚きようったらなかったよ。とても十六年間も可愛がってきた息子を見た反応じゃなかったね」
ベラは寝静まった集落を見渡しました。
ベラは何かを探して飛び立ちました。リラの精も仕方なく付いていきました。ベラが降り立ったのは集落から外れた一軒の空き家でした。
「ここがあいつらのもともと住んでいた家なんだよ」
ベラは庭ともいえない庭の一隅に立つ石柱の前に立ちました。
「これが生まれてすぐ死んだ本当の息子の墓なんだな」
ベラは手を土の中に突っ込んで掻き回しました。
「やっぱり。骨なんか埋まっていないよ」
「どういうこと？」
「さあ・・・。そいつをあの二人に訊いてみなくてはねえ」
ベラはものすごーく意地悪な顔で笑いました。

ベラは夢の世界に裁判所を作り上げると、ルピネーの育ての父親を被告として中央に立たせました。円形の傍聴席には立派な服装をした貴族たちに混じって地獄の鬼や死に神の姿もありました。そしていかめしい裁判長に扮したベラが雷のように響き渡る声で父親を尋問しました。

「おまえはマリオンを拾い育てたラズベリー伯爵の子と申しているが、それは誠のことであるか？」

父親は異様な雰囲気に怯えながらも頷きました。

「へい。その通りでございます」

「ふむ」

ベラは頷き、役人に一本の火のついたろうそくを持ってこさせて、瓶（かめ）に張った水に浮いた銀の皿の上に据えさせました。

「このろうそくはおまえの寿命を示している。この火が消えたとき、おまえは死ぬ」

父親はゴクリと喉を鳴らしました。

「そしてこの銀の皿は天上の女神より賜った真実を測る特別の秤だ。もしおまえが嘘をつけば、その嘘の大きさに応じて皿はどんどん重くなる」

父親は目を見開き、またゴクリと喉を鳴らしました。

「さて、もう一度尋ねる。マリオンがおまえの拾い育てたラズベリー伯爵の息子であるというのは誠であるか？」

「へい。間違いございません」

銀の皿がズブリと水に潜ったので父親は悲鳴を上げました。

銀の皿は完全に沈み込むことはなく、ろうそくの三分の一ほどを潜らせて止まりました。

「そ、そんな！　嘘なんか言ってやしねえよ！」

銀の皿がまた三分の一沈み込んだので父親はギャーッと悲鳴を上げました。

「や、やめてくれえ！　わ、わかった、正直に話す！」

銀の皿はほんのちょっぴり浮き上がりました。

ベラは残酷にニタリと笑うと尋ねました。
「さて、何を正直に話してくれるのかな？」
「じ、実は・・・、あいつは、マリオンは、伯爵の子なんかじゃねえ、わしと女房の息子でございます・・・」
銀の皿は動きませんでした。
「ほう！　マリオンはおまえの実の息子であったのか！
しかし、それではなぜ、マリオンを伯爵の子などと偽った？」
「い、いや、わしは別にあいつを伯爵の子などと偽ったわけではなく・・・」
銀の皿がズブズブと沈み、ろうそくはほんの指先ほどを残すのみになってしまいました。
父親は悲鳴を上げ、涙を流して訴えました。
「金が欲しかったんでさあ。あいつがお姫様にとんでもねえことをしでかして、わしらの息子と知れればわしらだって王様からどんなお仕置きを受けるか知れねえ。伯爵の子となれば罪を逃れられるばかりか、育てた恩で謝礼がもらえるかも知れねえと、そう思ったんでさあ」
「おまえは伯爵の息子の産着を持っていたな？　それをいったいどこで手に入れた？」
「そ、それは・・・・・・」
父親は怯えた目で揺らめくろうそくの炎を見つめました。傍聴席では死に神が手にした大鎌をギラギラさせ、骸骨の顎をカタカタ鳴らしています。
父親は観念してしゃべり出しました。
「伯爵様のお子さまを誘拐したのは、このわしでございます」
なんと、この父親はとんでもない悪党でした。
父親が涙ながらに白状したところによると、この男はもともと禁制品の密輸をしたりして悪いお金を稼いでいましたが、十六年前、生まれたばかりの伯爵の長男を爵位の継承を狙う伯爵の弟に手引きされて誘拐したのでした。誘拐した伯爵の子は身分を示す産着を脱

がせ、筏(いかだ)に乗せて川に流してしまいました。産着はいずれ伯爵の弟を強請(ゆす)る道具にしようと取っておいたのですが、伯爵の弟は、天罰が下ったのでしょうか、狩りの最中に落馬して、死んでしまったのでした。

自分の生まれたばかりの子が死んでしまったなど、全くの口から出任せでした。

「へい、間違いございません。マリオンは確かにわしの子でございます」

父親の話はすべて真実らしく、銀の皿は少しも沈みませんでした。

「なるほど、よく分かった。それでは判決を申し渡す」

ベラはニヤニヤ笑って言いました。

「おまえは、『十年命を縮める』の刑だ！」

銀の皿はズブズブ沈んでいき、とうとうろうそくは水に潜って、ジュッと音を立てて火が消えました。

父親はヒッと叫んで、夢の中で気絶してしまいました。

母親の方もベラ裁判長によって取り調べが行われました。

母親は寿命のろうそくで脅されるまでもなく、すっかりくたびれた感じで、求められるまま従順に答えました。

「あの人からマリオンを伯爵の子に仕立てる計画を聞かされたとき、ああそうか、やっぱりあの子はわたしの子ではなかったのだと納得しましたよ」

母親は、ベラさえゾッとするような異様な目つきでマリオンのことを話しました。

「あの子は生まれたときから変だった。あのガラス玉のような目が最初からぱっちり開いて、まるで大人みたいな目つきをしていた。一言も泣き声を上げなかった。どこか悪いんじゃないかとずいぶん心配したもんだが、立ち上がって歩くようになるのも、言葉をしゃべるのも早くて、すごくいい子だったよ。ただ、かわいくはなかった。まるでよく出来たお人形みたいでね。目が悪いようだったから、

そのせいだろうと自分に何度も言い聞かせたけれど、どうしてもあれが自分の子だとは思えなかった。亭主も気味悪がって、町の彫金師の親方のところに弟子に出そうと言い出したときにはあたしもほっとしたよ。あの子はやたら手先が起用だったからね、あたしもその方がいいだろうと言ったよ。まだ七歳だった。それっきりこの間まで一度も会っていなかったが、けっきょく、あたしはあの子が笑った顔を一度も見ていないんですよ」

夢の中の様子はリラの精もベラに頭の中に中継してもらって見ていました。

「ルピネー、いえ、マリオンはカラベラスの分身ね。カラベラスが禁断の魔法科学を使ってこの夫婦に産ませたのだわ」

ベラも同意しました。

「ということは、額の祝福の口づけも偽物ということになるな」

「当然ね。あいつは女王様の呼び出し状まで偽造するのよ」

二人はお城に向かって飛びながら、これからの計画を話しました。二人はすっかり仲間になっていました。

ベラはサファイアの精を連れて、川に流された本物のルピネーを捜すことにしました。もしかしたらとっくに死んでしまっているかも知れませんが、子どもっぽくてお調子者でも、サファイアの精は力の強い妖精でしたから、その祝福を受けた子が簡単に死んでしまうとは思われないのでした。祝福を与えたサファイアの精自身でさえ見分けの付かない印がある以上、本物を見つけださないことにはマリオンが偽のルピネーだとは誰も信じてくれません。

サファイアの精はベラに脅されて、嫌々ながら本物のルピネー捜しの旅に出かけていきました。

偽ルピネーのマリオンも一度国に帰ることになりました。

伯爵夫妻がひどく心配しているからでした。

「姫の指輪を外せないまま去らねばならないのは心苦しい限りですが、お誕生日の前には必ず戻ってまいりますので、今しばらくご猶予ください」
マリオンはそう王様に挨拶してお城を後にしました。
オーロラ姫はもちろんひどく残念がりました。
「きっと、きっと誕生日には来てくださいね」
そう、出発前に、何度も何度も約束をしました。

第9章　リラの精の憂鬱

ルピネーが去ってからというもの、オーロラ姫はルピネーを思ってため息ばかりついていました。

あんまり物思いにふけってばかりいるものですから、ディナが気晴らしをしてもらおうと、一つ、提案をしました。

「今度のお誕生日に着るドレスを、ご自分で作ったレースで飾ってはいかがでしょう？　もちろん私もお手伝いいたしますわ」

お誕生会に向けて新しいドレスを作らせている最中でした。

オーロラ姫はこの提案に興味を示し、ドレスのデザインを取り寄せて、ディナといっしょにどんな風にレースで飾ろうか相談しました。

実際に刺繍を始めてみると、ディナの教え方もよく、難しいところはディナが手伝ってくれますので、綺麗な模様が次々生まれてきて、美しい流れにつながっていき、オーロラ姫はすっかり夢中になってしまいました。

オーロラ姫は刺繍をしながら、レースで飾ったドレスを着て踊る自分を夢想してとても楽しい気持ちになりました。

夢の中でいっしょに踊っている相手は、ルピネーでした。

オーロラ姫はハッとして、ディナにすまなく思いました。

手の止まってしまったオーロラ姫に気づいて、ディナはその心中を察して言いました。

「人の心とは移りゆくものですわ。オーロラ姫の素直な気持ちこそもっとも正しいものだとわたしは思います。今のわたしにとって、もっとも大切なものは、オーロラ姫、あなたの温かい友情です」

オーロラ姫はたまらずにディナを抱き締めて訴えました。

「わたしこそ、あなたの友情にどれだけ感謝しているか。あなたはわたしのもっとも大切なお友だちよ。どうかずっとずっとお友だちでいてちょうだいね」

シルバー王子がお城に訪ねてきました。
オーロラ姫はいつものように王子とお庭を散歩したりしましたが、二人の間にはどうにもぎくしゃくしたわだかまりがありました。
王子は城一番の剣術の師に剣術の稽古を付けてもらいましたが、師から一本も取ることが出来ませんでした。
師は顔を曇らせて言いました。
「力で剣を振り回すばかりで、まるでいつもの流れるような鋭さがありませんな」
ユリアも心配して言いました。
「王子、力では何も解決しませんよ」
王子も苦しんでいました。自分でも分かっているのですが、気ばかり焦って、何かしないではいられないのでした。

夜になっても王子は寝付くことが出来ず、城の中をどことなく歩き回りました。
すると、女の忍び泣く声が聞こえてきて、王子はホールの柱の影に泣いているディナを見つけました。
「何を泣いているのです？」
王子が尋ねてもディナはなかなか答えませんでした。
「恋人のことを思っているのですか？」
ディナは悲しい目を上げて、やっと答えました。
「あの人は、もう、わたしを愛してはいません」
「なぜ、そんなことを言うのです？」
王子も心を痛めながら言いました。
「あなたは見違えるほどに美しくなったではありませんか。そんなあなたから、ルピネー殿が心移りするとは思えません」
ディナはますます悲しい目をして言いました。
「あの人の目にはわたしの顔など見えていません。いいえ、オーロラ姫の顔だって見えてはいません。あの人には見かけの美しさなん

てどうでもいいのです。あの人が求めるのは、心の純粋な美しさ・・・」
「それならば、なおのこと、あなたほど心の美しい人はいないでしょう？」
「いいえ」
ディナは悲しそうに微笑んで王子を見つめました。
「わたしの心からは以前の純粋な思いは消えてしまいました」
ディナの濡れた目に見つめられて、王子はハッとしました。
「ごめんなさい・・・」
ディナは目を伏せると走り去りました。
ディナの後ろ姿を見送り、王子は呆然と立ち尽くしました。
「あーあ、かわいそうに。あの娘には悲劇しか待ち受けていないわ」
王子がギョッと振り返ると、高い天井からリラの精が下りてきました。
「どういうことです？」
王子は覗かれていた恥ずかしさからきつくリラの精を問いつめました。
リラの精はしばらく考え込みましたが、けっきょく、ルピネーがカラベラスとつながりがありそうなことを王子に教えました。
「ルピネーがカラベラスの手先だということになれば、あの娘の恋心も、このお城での地位も、いっぺんに砕け散ってしまうわ」
「そんな、まさか・・・」
王子はリラの精の告白に衝撃を受けました。
「だからって、あの娘に同情しては駄目よ」
リラの精は王子に厳しく釘をさしました。
「あなたはオーロラ姫だけを愛さなくてはならないのよ。絶対にオーロラ姫をルピネーに渡しては駄目。あの人の心は、打算的で、愛なんてありはしないわ」
リラの精はもうまるでルピネーを信用していませんでした。あのディナだってきっと王子を誘惑するようにし向けられているのだろ

うと思いましたが、かわいそうで、王子には言いませんでした。
「王子、思い出して。ダイアモンドの精が祝福にあなたに贈ったものを」
「『透き通った純粋な心』……」
「そうよ！」
リラの精は王子を励まして言いました。
「あなたには真実の愛の心がある。その真実の心でオーロラ姫だけを愛するのよ！」
しかし、王子は、その心が純粋であればあるほど、今の自分が果たして本当に心からオーロラ姫を愛しているのか、自信を持てないのでした。
リラの精は王子のふがいない態度にため息をついて、吹き抜けの二階に飛ぶと、バルコニーへのドアを開け、外に出ました。
リラの精は月光の降り注ぐ夜空に向かって両手を広げました。
「春に息吹く若芽たち、慈しみ合う鳥たち、獣たちよ。ほんの少しずつあなたたちの生きる喜びを、情熱を、わたしに分けてちょうだい」
どこからともなく温かい桃色の光たちが集まってきて、リラの精の広げた両手の間に溜まっていきました。それが胸に抱え込むほどの大きさの光の玉になると、リラの精は両手を閉じて玉を包み、力を込めてギュウッと小さく凝縮させました。
リラの精が手を開くと、アーモンドの実のような種子が出来上がっていました。
リラの精は王子の元に戻ると、それを見せて言いました。
「これは愛の種。恋心を激しく燃え上がらせて、ちょっとやそっとじゃ冷めることはないわ。すっごく幸せな気持ちになれるけれど、間違った人が使うと指輪の呪いに負けないくらい悲劇的なことになってしまうわ」
リラの精は説明だけすると、愛の種を自分の胸の内にしまってしまいました。

「今はまだあなたにあげるわけにはいかないわ。オーロラの誕生日になって、その時にあなたの心から迷いがなくなっていたら、あげるわ」
リラの精はニッコリ笑って言いました。
「あなたとオーロラはルピネーなんかよりずうっと長い時間をいっしょに過ごしてきたのよ。子どもの頃からのいっしょに過ごした時を思い出してごらんなさい。あなたがオーロラを好きならば、迷いなんてすぐに消えてしまうわ」
リラの精は感じていました。
オーロラ姫がルピネーに惹かれるのは、指輪の魔力がルピネーの危険な性質を敏感に感じ取っているからだろうと。
王子の真実の愛がオーロラ姫の心に通じたとき、指輪は自ずと魔力を失うであろう、と。

第１０章　誕生日の朝

オーロラ姫の十七歳の誕生日がいよいよ迫ってきましたが、あいにくとその七日前からひどい嵐となり、外国から招待のお客たちはロヴィーク国に入ることが出来ず、誕生日前には必ず戻ってくると約束したルピネーも、前日の夜になってもまだ到着していませんでした。

王様はこの嵐をカラベラスの仕業ではないかと恐れましたが、ユリアも同じように疑っていました。

本物のルピネーを捜しに行ったベラとサファイアの精からもその後なんの連絡もなく、ユリアをイライラさせました。

誕生日を翌日に控えたオーロラ姫は、いっこうにやむ気配のない嵐の窓の外を眺めてため息をついてばかりいました。

オーロラ姫はユリアに、嵐はいつになったらやむのかしら、と尋ねました。

ユリアは、

「大丈夫、明日は絶対に晴れるわ」

と、自信満々に答えました。

オーロラ姫は気持ちを切り替えて、ドレスを眺めて明日のお誕生会を夢見ました。

ディナといっしょに作ったレース刺繍を飾ったドレスは、素晴らしく美しく、清楚な輝きを放っていました。

オーロラ姫はディナを呼んで、衣装部屋に隠しておいた特別注文のドレスを見せました。

「あなたにプレゼントよ」

ディナは目を見張ってドレスを眺めました。

素晴らしく光沢のある絹地に金糸で刺繍の施された、贅沢な、お姫様が着るべき豪華なドレスでした。

「これを着て明日の舞踏会に出るのよ」
「これを着てわたしが姫様のお誕生会の舞踏会に・・・」
「外国から来たお客さんはきっとどっちがわたしか分からないわ」
「ああ、オーロラ姫！」
ディナは感激のあまり思わずオーロラ姫に抱きついてその頬に感謝のキスをしました。
ハッと慌てて離れると身分違いのはしたない行いをお詫びしました。
「さあ、来て！」
オーロラ姫は姿見の前にディナと並んで立って、それぞれのドレスを胸に当て、無邪気に笑いました。

その夜オーロラ姫は外の嵐も気になってなかなか眠れず、ユリアに眠りのキスをしてもらってようやく眠りにつきました。
オーロラ姫の寝顔はとても幸せそうで、明日の悲劇を思うとユリアはたまらなく切ない気持ちになりました。
「お休み、わたしのオーロラ。明日には、きっと、もっと素晴らしい夢が見られるわ」

夜が明けると、嵐は去り、空は真っ青に晴れ渡りました。
朝一番でシルバー王子が愛馬に跨ってお城に到着しました。
王子は出迎えに出たユリアに、実にさわやかな笑顔を見せました。
「早くオーロラ姫に会いたくて、まだ嵐の残っている内に宿を出発してしまいました」
王子は雨よけにマントを重ね着て、とても寒そうでした。
王子はあんまり朝早く着いてしまったので、お城はまだ目覚めの準備の最中でした。王子は、お城の作法なんて全然気にしないユリアといっしょにじゅうぶん温まっている女中の賄い(まかな)部屋で熱いお茶を出してもらいました。

恐縮してお茶を持ってきた女中が悲鳴を上げて飛び退きました。
王子のマントの裾から一匹の鼠が飛び出してきたのです。
しかしこの鼠、普通の鼠とは違っていました。
ふわふわの長い毛が金色に輝き、走った後に金色の輝きを残していくのです。
鼠は賄い部屋を飛び出ると、お城中を駆け回り、あちこちで悲鳴を上げさせ、お城は早朝から大騒ぎになりました。
男たちは鼠を退治しようと追いかけ回しましたが、騒ぎを聞いた王様は妙な気がして、鼠はけっして殺さず、その行き先を突き止めるように命じました。
鼠はすばしこくチョロチョロ駆け回りましたが、金色の輝きを後に残していくので、後を付けるのは簡単でした。
鼠は何かを探すように城中を駆け回っていましたが、とうとうある一室に入っていきました。
そこは特別な人の部屋で、男たちは入ることをはばかられ、ユリアと王子が代表して入ることになりました。
そこはディナの私室でした。
ノックの音にディナはまだ寝間着のまま眠そうな顔でドアを開けましたが、王子を見ると真っ赤になって、奥に駆け戻って厚いガウンを羽織ってきました。
ディナはよほどぐっすり眠り込んでいたのか、外の騒ぎにも気づかない様子で、廊下に群がる人々を見てまたびっくりしていました。
ユリアと王子が金色の輝きを辿っていくと、それは衣装戸棚に続いていました。
開いてみると、そこには昨日オーロラ姫から賜(たまわ)った豪華なドレスが大事に掛けられていました。
しかし、その陰に、ユリアは大変な物を見つけて声を失いました。
ドレスの陰に隠れて、国では使用の禁止されている糸車が置かれていたのです。
ディナはそれを見て、うろたえて叫びました。

「知らない、そんな物置いた覚えはないわ！　そんな物、きのうは確かになかったわ！」

糸車の針はオーロラ姫に呪いを掛ける忌まわしい道具なのです。いかにディナがオーロラ姫のお気に入りでも、王様に指示された取調官の追求は厳しいものでした。

「おまえはルピネー殿の元婚約者であったにもかかわらず、それが叶わぬとなると、近頃ではシルバー王子に身分違いの恋心を抱いているともっぱらの評判ではないか。シルバー王子を我がものとする為に邪魔なオーロラ姫を亡き者にしようと魔女の呪いの手助けをしたのではあるまいな？」

ディナは怒りに満ちた目で取調官を睨みつけて、断固疑いを否定しました。

不思議なことに、発見された糸車には肝心の針が付いておらず、部屋中隅から隅まで捜索されましたが、針は見つかりませんでした。

ディナは、どこかに針を隠したのだろう？と厳しく問いつめられましたが、これも知らないと頑固にはねつけました。

ディナが黒魔女の呪いに関わることで取り調べを受けていると聞いて、オーロラ姫は猛然と王様に抗議しました。しかしこればかりは姫の命に関わることなので、王様も頑としてディナの取り調べの中止を拒否しました。

オーロラ姫は、ディナが自分に呪いを掛ける手伝いなんてするわけないと、ユリアにも涙ながら訴えました。

ユリアは困ってしまいました。

ユリアは糸車を置いたのはルピネーではないかと疑っていましたが、肝心のルピネーはまだ到着していませんでした。誰かがオーロラ姫のお気に入りのディナに嫉妬して糸車を置いたとも考えられますが、するとあの不思議な鼠がなんであったのか分かりません。城の人々は、あれは魔女の企みを暴く為に神がお使いになった使者だ

と噂し合っていました。
ユリアはなんとも判断が付かず、王様とオーロラ姫の間を取り持つように進言しました。
「糸車が出てきた以上ディナを疑うのは仕方ないこと。しかし肝心の呪いの針が見つかっておりません。噂の通り誠にあの鼠が神の使いであったなら、まず何よりも針を見つけだしてくれるはず。しかしあの鼠はどこに行ったやら姿を消してしまいました。ディナへの取り調べは意味のないことに思いますが、かわいそうですが、念のためディナは今日一日外から鍵を掛けた部屋に閉じこもっていてもらうということでいかがでしょう？」
オーロラ姫は悲痛な表情で抗議しましたが、王様はユリアの提案を受け入れることにして、ただちにディナを塔に監禁するよう命令を出しました。
ユリアはずいぶんオーロラ姫に恨まれましたが、仕方ありません。ユリアは場合によってはルピネーの正体を暴き、対決しなければなりません。いずれにしても、ディナにとって今日が辛い一日になることに変わりはありませんでした。

お誕生会の準備がすっかり整い、招待されたお客たちが続々オーロラ姫への贈り物を持ってお城にやってきました。
しかしどんなに豪華な贈り物をされてもオーロラ姫の心は晴れませんでした。
一流の料理人が腕を振るった豪勢な昼食のご馳走もまるで喉を通りませんでした。
朝方までの嵐の影響でしょうか、心待ちにするルピネーもまだ到着していないのでした。
オーロラ姫の心はルピネーに会いたい気持ちのみに占められていました。

王子はオーロラ姫のあまりの元気のなさに心配しました。
ユリアは王子を人けのない廊下に呼ぶと、尋ねました。
「オーロラ姫を愛するあなたの心に少しの迷いもない？」
「ええ」
王子はしっかり頷きました。
「何があろうとも心から姫を愛し続け、何ものからも姫を守り抜く覚悟がある？」
「ええ。たとえこの身が滅びようとも」
ユリアは頷き、ちょっぴり心配そうに王子に訊きました。
「ディナのことは、大丈夫？」
王子は頷き、言いました。
「自分の心を見つめてはっきり分かりました。わたしが愛するのはオーロラ姫のみ。ディナは、気の毒な人ですが、彼女に対する思いは同情のみです」

塔のてっぺんの部屋に監禁されたディナは椅子に腰掛け、何もない白い壁を向いていましたが、王子の言葉が発せられた瞬間、まるでその言葉が聞こえていたかのように、今まで見せたことのない恐ろしい目をして怒りを露わにしました。

ユリアはドレスの胸の内から愛の種を取りだし、王子に差し出して言いました。
「この愛の種はすごく強い薬よ。愛する人と結ばれたときにはこの世の最上の幸せを味わうことが出来る。しかし、もし、その思いが相手に受け入れられないときは、地獄の苦しみを味わうことになるわよ」
ユリアは王子の決心を確かめるようにその目を覗き込みました。
「これを飲むか飲まないかは、あなたに任せます。飲めば、あなたのオーロラ姫への思いは揺るぎないものになるでしょう。しかしそれは、カラベラスの呪いと真っ正面から戦う覚悟を迫るものでもあ

るのよ」
　王子は手渡された愛の種をじっと見つめましたが、自分の心が既に定まったものであることを確認すると、口に含み、カリッと噛みました。種は砕け散り、なんとも言えない良い香りを口中に振りまき、スーッと溶けていきました。

　塔の中のディナは恐ろしい目つきをしたまま、口の中で低い笑い声を上げました。
「面白いじゃないか。王子よ、その覚悟のほど、存分に見せてもらおうか」
　優しく純朴なディナとはガラリと変わったその恐ろしい顔は、まさに魔女そのものでした。

　お昼をだいぶ回ってから、ようやくルピネーと伯爵夫妻の到着が報告されました。オーロラ姫は顔を輝かせましたが、同時に、城の外での騒ぎが報告されて、王様たちは何事かと緊張しました。
　ルピネーたちの馬車がお城の外門をくぐったすぐ後から、何者か、若い大男が、
「おっ父ー！　おっ母ー！」
　と大声を上げて馬車を追いかけてきて、守衛に押しとどめられて大暴れを始めたのです。
「何事か！？」
　駆けつけた王様はこの大男に問いただしました。
「その方こそ誠のルピネー様ですわ」
　そう答えたのはサファイアの精でした。
「な、なんだと！？」
　王様はまるで熊のように大きい若者をまじまじと見つめました。
「馬鹿な！　ルピネー殿ならあそこにおられるではないか！」
　ルピネーと伯爵夫妻は自分たちと関わりがあるらしいと知って、

馬車を止めさせ、事の成り行きを不安そうに眺めていました。
「いいや。あれは魔女カラベラスが用意した真っ赤な偽者さ」
ベラが縄で縛り上げたマリオンの父親を突き出しました。
父親はよほどベラにひどい目に遭わされたらしく、王様の前に出るとべらべら正直に自分のしでかした悪事について包み隠さずしゃべってしまいました。
伯爵夫妻もあまりのことに馬車から降りてきて、若者を呆然と眺めました。
サファイアの精が若者の額に息を吹きかけると、キラキラと、証拠の祝福の口づけの跡が輝きました。
サファイアの精は胸を張って得意げに言いました。
「この子は筏で海まで流されて、漁に出ていた船に拾われ、そのまま漁師の夫婦に育てられたの。こんなにたくましく成長して、今では漁師村の若頭として立派に働いているわ！」
身分の証明された本物のルピネーは、あっけにとられている守衛たちを振り払ってズカズカ歩いていくと、満面の笑顔で伯爵夫妻を抱き締めました。
「おっ父！　おっ母！　会えて嬉しいよ。いやあ、この俺のおっ父おっ母がこんなに立派な人だったなんて、感激だあ！」
あまりのことに、伯爵夫人は息子の腕の中で気を失ってしまいました。
呆然としていた王様は、気を取り直すと、ルピネー、いえ、マリオンに厳しい目を向けました。
「すると、おまえは黒魔女カラベラスの手先であったわけだな。湖で姫が危険な目に遭ったのも、おまえの仕業であったのだな」
王様は怒りにわなわな震えました。
「衛兵！　この男を牢に閉じこめろ！　後日首を切り落としてくれる！」
「父上、どうかお待ちください」
ユリアに付き添われてオーロラ姫がやってきました。

オーロラ姫はここに来るまでにユリアに事の真相を聞かされていました。
オーロラ姫はルピネーが偽者と知って、激しく動揺し、顔からはすっかり血の気が失われ、ふらふらと頼りない足取りでユリアに支えられていました。
オーロラ姫とマリオンは悲しい目で見つめ合いました。
「その人は自分から伯爵の息子を名乗った訳ではありません。命がけでわたしを救ってくれたのも事実。その人は、自分では何も知らないまま魔女に利用されていたのでしょう」
オーロラ姫はくずおれるように王様の前にひざまずきました。
「どうか、この人をお許しください。どうか、罪を問うことをおやめください」
オーロラ姫の左手の指輪は、何者へとも知れぬ怒りで怪しく輝いていました。
王様は憎々しげにマリオンを見て、命じました。
「衛兵。この男を早馬車に乗せ、ただちに国の外に追放しろ！」

失意に沈むオーロラ姫に更に悲しい事態が追い打ちを掛けました。
マリオンが偽者のルピネーであったことを知らされたディナが、自分もお城を出ていくと申し出たのです。
このことにオーロラ姫も反対することはしませんでした。
ここで引き止めることがディナにとってはもっと辛いことになるだろうと思ったのです。
ディナはお城に来たときの粗末な服を着て、通用門からひっそりお城を出ていきました。

女中が部屋に引きこもったオーロラ姫の元にディナに言付かった贈り物のドレスを持ってきました。
ディナもこのドレスを着て舞踏会に出ることをとても楽しみにしていたのでしょう、ドレスの胸にはレースの余りで作ったバラの花

の飾りが止められていました。
オーロラ姫は改めて悲しみがこみ上げてきて、体を震わせて泣きました。
ずいぶん泣き続け、窓の外は暗くなってきてしまいました。
侍女が心配しながら夕食会と舞踏会の時間を知らせに来ました。
大勢のお客さんを待たせて、形だけでも出席しないわけにはいきません。
オーロラ姫は憂鬱な目でディナと二人で作ったドレスを眺めました。
とてもこれを着て舞踏会に出る気にはなりません。
オーロラ姫は、ディナが残していった贈り物のドレスを着ることにしました。

第１１章　十七歳の誕生日

日が沈み、夕食会と舞踏会が平行して開催されました。
オーロラ姫はまず夕食会に出席しましたが、何も食べようとはせず、豪華な料理を前になんともうち沈んだ食事会になってしまいました。
食事は早々に切り上げ、舞踏会場に移ったオーロラ姫でしたが、椅子に座るばかりでちっとも踊ろうとしません。
ユリアが一年前のようにダンスに誘いましたが、それさえオーロラ姫は受けませんでした。
シルバー王子がダンスに誘いました。
オーロラ姫は気が乗りませんでしたが、王子は言いました。
「わたしのために踊ってくれませんか？　わたしだってあなた以上に今日という日を心待ちにしていたのですよ」
オーロラ姫はため息をついて、仕方なく立ち上がりました。
ようやく踊る気になったオーロラ姫と王子に周りのお客たちは温かい眼差しを送りました。
音楽に乗って二人は踊り出しました。
体を動かしているうちに、オーロラ姫の心はだんだん軽くなってきて、なんだか楽しい気分になってきました。すると、今度は王子の妙に熱っぽい目が気になって仕方ありません。
「シルバー王子。なんでそんな目でわたしを見るの？」
「それはもちろん、わたしがあなたに恋しているからです」
オーロラ姫は王子にそんなことを言われたのは初めてなのでびっくりしました。
「あなたが五歳くらいの頃からなんてかわいらしいお姫様だろうって思っていたのですよ」
オーロラ姫はそんな子どもの頃のことはよく覚えていません。ただ、王子のことは生まれたときからずうっと知っているように思っ

ていました。
「そしてあなたは今、こんなに美しい乙女に成長された。あなたはわたしがあなたにふさわしい男であろうとどれだけ努力しているか知らないでしょう？」
微笑んで話す王子の目はなんとも温かく幸せそうで、オーロラ姫も自然と微笑み返しました。
オーロラ姫の胸元からなんとも言えない良い匂いが立ち上ってきました。
王子がその匂いにうっとりしていると、目の前がぼやけ、目を瞬かせると、オーロラ姫の姿がディナに変わっていました。
王子は我が目を疑いました。ディナはたまらなく官能的な匂いをさせて王子に嫣然（えんぜん）と微笑んでいます。
ユリアは突如わき上がった魔力の気配と、王子のおかしな様子にハッとしました。
ユリアは心の声で王子に呼びかけました。
『気を付けて、カラベラスの魔法よ。いったんオーロラから離れて』
王子はカラベラスの魔法と聞いて心が燃え上がりました。
『大丈夫です。魔女の幻ごとき、きっと打ち勝って見せます』
王子は踊り続けました。
ユリアは心配ではらはらしましたが、ここは王子を信じて見守ることにしました。
王子はディナの幻と踊り続けながら、言いました。
「あなたは自分に呪いを掛けたカラベラスという魔女をご存知ですか？　わたしは幼いとき彼女があなたに呪いを掛けた現場に居合わせたのですよ。カラベラスは幼いわたしの目にもそれはそれは美しい女でした。しかし同時にわたしは知ったのです、世の中美しいものがすなわち善なるものではないのだな、と。わたしがあなたをこんなにも好きなのは、あなたの美しさばかりでなく、共に過ごした時間の分だけ、あなたという人の心を知った分だけ、あなたが愛しくてならないからなのですよ」

お城の街の彼方の荒野で、水晶玉に映し出される王子の言葉を聞いてディナは歯ぎしりして悔しがりました。
そのディナの前にベラが現れました。
「まさかおまえがカラベラスだったとはね。よくもこのあたしをだましてくれたね！」
ディナ、いえ、カラベラスは水晶玉から顔を上げると、怒りに燃えるベラをあざ笑いました。
「おまえのくれた祝福は大いに役に立ったよ。あのリラの精の目さえごまかす闇を作り出せたのだから、たいしたものだ。礼を言うよ」
「馬鹿にするんじゃないよ！」
ベラは得意の風の刃をカラベラスに投げつけました。
カラベラスが軽く左手を振ると、もの凄い竜巻が起こって、ベラの投げつけた風の刃を簡単に吹き飛ばしてしまいました。
カラベラスは黒髪を振ると、黒いマントを羽織った魔女の姿になりました。
「このわたしに風で戦いを挑むとは身の程知らずもいいところだが、祝福を与えてくれた礼だ、丁重にお相手させてもらうよ」
カラベラスは右手で風を巻いて人差し指を突き出しました。竜巻が鋭い槍となってベラを襲いました。ベラは慌てて避けて、黒魔女のあまりの力の強さにぞくりと震えました。
「ハハハハハハ」
カラベラスは高笑いを上げて次々風の槍を繰り出しました。

王子と踊るディナはニッコリ笑うと、その顔はオーロラ姫に戻りました。
オーロラ姫は楽しそうに王子と踊り、いつしかその目は王子と同じように幸せそうに潤んでいました。
王子は踊りながら、そっと、オーロラ姫の左手に手を重ねました。

ベラは必死に風の刃を操ってカラベラスに反撃しましたが、まるで叶わず、嵐の中の木の葉のように弄ばれていました。
「そらそら、どうした？　身体がバラバラに千切れてしまうよ」
ベラの体はカラベラスの風に切り刻まれて傷だらけになっていました。
「生意気な妖精め、塵になっておしまい！」
力を込めた一撃がベラを襲い、ベラは必死に避けましたが、半身を巻き込まれ、とうとう地面に落下してしまいました。
「さようなら、ベラ」
カラベラスはとどめの一撃を打ち込もうとしましたが、その時、水晶玉の中で王子の手がオーロラ姫の左手から指輪を抜き取りました。
「チッ、王子め、生意気な・・・・」
ベラはカラベラスがよそ見をした隙に空に飛び上がり、よろよろと飛んでいきました。
カラベラスは大風を起こそうと手を振り上げましたが、嘲りの笑みを浮かべてやめました。
「観客は多い方が楽しいさ」

王子は抜き取った雷の指輪をそっとポケットにしまいました。オーロラ姫は指輪が抜き取られたことにも気づかず、王子の顔を見つめて踊り続けていました。
姫の心は今、恋の幸せの絶頂にありました。
その瞬間、ドレスの胸に飾られたレースの薔薇から針が飛び出し、オーロラ姫の胸をチクリと刺しました。
オーロラ姫は、うっ、と息を呑み、王子の腕の中に倒れ込みました。
「魔女の呪いだ！」
周囲は騒然となりました。
王妃様は気を失い、王様は真っ赤になって駆け寄りました。

「さあ王子よ、姫に真実の愛の口づけを！」
ユリアが王様を落ち着かせて言いました。
「わたしの魔法は今日一日が過ぎるまで効果を持ちません。真夜中を過ぎるまで、もうしばらくお待ちください」
王様はホールに運び込んだ最新式の時計を見ました。時刻は十時を回ったところで、真夜中までは二時間ほどありました。
ユリアは自信にあふれていました。オーロラ姫はすでに王子の真実の愛を胸に抱いています。
この上黒魔女がどんな手を用いてこようと、真実の愛の勝利は絶対に疑いようもありません。
王様は王子に姫を寝室に運ぶよう頼みました。
王子が姫を抱きかかえ、歩き出そうとしたとき、ぼろぼろに傷ついたベラが窓から飛び込んできました。
「カラベラスの奴が襲ってくるよ。あの女が、ディナがカラベラスだったのさ！」
ベラの悔しそうな叫びに、ユリアもまさかと叫びました。
「そんなはずないわ！　あんなに長い時間いっしょにいて、魔女の魔力を感じないわけないわ！」
「あいつはあたしたちがまともに叶うような相手じゃないのさ」
ベラの悔し涙を浮かべた顔を見てユリアも信じないわけにはいきませんでした。
お城の門の方から男たちの争う声と、悲鳴が聞こえてきました。
王様は衛兵にただちに魔女を迎え撃つよう命令を出しました。
しかし、兵たちをなぎ倒し、大ホールに現れたのは、カラベラスではありませんでした。

第12章　イバラの森

「マリオン！」
ホールの入り口に現れたのは一振りの剣を構えたマリオンでした。
王様はマリオンが相手と知ると怒りを露わに兵たちを叱りつけました。
「あのようなものに何を手間取っている！　さっさと殺してしまえ！」
衛兵たちが槍を構えて突進しました。マリオンは突き出された槍を素早くかいくぐり、すべて根元から切り落としてしまいました。そして、鋼鉄の盾を持った一団が押し寄せてくると、左手を広げて、雷を迸(ほとばし)らせました。盾の一団ははじき飛ばされ、真っ黒になって気を失いました。
お客たちは悲鳴を上げて我先にとホールを逃げ出しました。
「雷(いかずち)の指輪！　なぜマリオンがあの指輪を！？」
リラの精の驚きに答えるように、バルコニーに竜の背からカラベラスが降り立ちました。
「その男の着けているのは偽の材料で作った偽の雷の指輪。オーロラ姫の本物の雷の指輪を使えば簡単にその男を殺せるわよ」
ベラは憎々しげにカラベラスを見上げ、人間の大きさになると指輪を求めて王子に飛びかかりました。
ユリアはベラを押しとどめて、王子のポケットから雷の指輪を取り出しました。
「そいつをよこしな！」
ベラはユリアに掴みかかりましたが、ユリアは指輪を渡そうとはしませんでした。
「こんなもの使っては駄目よ！　もし、どうしても使わなければならないときは、その時は、わたしが使うわ」
ユリアは激情に潤んだ目でカラベラスを見つめました。

「あなたは本当にあのディナなの？」
カラベラスはニッコリ、ディナの顔で言いました。
「そうよ、ユリア。仲良くしてくれてありがとう。この一年はとっても楽しかったわ」
ユリアは怒りに震え、リラの精に戻ると、カラベラスに突進しました。
カラベラスの前にマリオンが浮き上がり、リラの精めがけて剣を振り下ろしました。
マリオンは指輪の力を使って妖精みたいに高く遠く飛ぶことが出来るのでした。
リラの精はカラベラスを攻撃しようと何度も挑戦しましたが、指輪を操るマリオンにことごとく阻止されました。
恐ろしい雷の指輪をこんなにも自在に使いこなす者にリラの精はぞっと恐怖を感じました。
「この卑怯者！」
リラの精は悔し紛れに叫びました。
「あなたの呪いはもう効果を持たないのよ！　王子の真実の愛があなたの呪いをうち破ったのよ！」
「さあ、それはどうかしら？」
カラベラスは王子の腕に抱かれて眠るオーロラ姫を眺めて楽しそうに言いました。
「わたしはあなたと戦おうなんてこれっぽっちも思っていないわ。わたしはあなたが大好きだもの。それに、わたしと直接戦おうなどと、そうね、百年は早いわよ」
カラベラスはギラリと目つきを変えると言いました。
「おまえたちにはその作り物のお人形で十分さ。
教えてやろう、そのマリオンはこのお遊びのためにわたしが作ってやったおもちゃさ。おまえたちはわたしがオーロラ姫の気持ちを惑わすためにその男を近づけたと思っているだろう？　そうではない。その男に愛というものを教えてやるためにオーロラ姫に近づ

けたのさ。作り物の身体に魂は宿らない。だからわたしは命令した、オーロラ姫を愛せ、と。魂のないその胸に唯一宿っているのは、純粋にオーロラ姫を愛する思いのみ」

「嘘よ！　オーロラ姫を本当に愛しているならこんなひどいことをするはずないわ！　こんな相手の気持ちを無視した思いなんて、愛ではないわ！」

カラベラスは勝ち誇った笑みを浮かべました。

「それでは、おまえたちの真実の愛がその男の作り物の愛に勝てるかどうか、試してみるのだな。わたしは手を出さない。その男に特別な力は一つもない。妖精二人に雷の指輪。まがい物の雷の指輪相手など楽に勝てるだろう？」

カラベラスは黒いマントを翻して竜に乗ると、高笑いを残して去っていきました。

マリオンはオーロラ姫を抱きかかえた王子に目を向けると、猛然と突き進みました。

王様の命令で衛兵たちが襲いかかりましたが、次々マリオンの剣と雷に倒されていきました。

「妖精の力を侮るんじゃないわよ！」

ベラが風の刃を繰り出しましたが、マリオンは雷をまとわせた剣で軽くあしらいました。それどころか、傷ついたベラにマリオンは容赦なく雷を迸らせました。

ベラは悲鳴を上げ、はじき飛ばされました。

リラの精は悲しみと怒りに震え、決心を固めると光を集めてマリオンを攻撃しました。

光の槍はマリオンの頬をかすり、ぱっくり開いた傷口から赤い血を流させました。しかしマリオンの顔には驚きも、痛みも、怒りも、なんの感情も現れませんでした。

マリオンはリラの精にも雷を迸らせました。衛兵たちはあらかた倒されてしまい、後から駆けつけた援軍も妖精と魔力を操る者との戦いに為す術もなく、負傷者の収容に勤めるくらいしか出来ません

でした。
王子はオーロラ姫を衛兵に預けて運び出してもらおうとしました。すると雷が逆り、衛兵の足下の床を切り裂きました。マリオンはリラの精と戦いながらけっしてオーロラ姫の行方から目を離しませんでした。
王子はオーロラ姫を絨毯の上に寝かせると、床に転がった兵士の剣を拾い上げて二人の戦いの行方を追いました。
リラの精は力においてもとても優れた妖精でした。最初は有利に見えた戦いも、マリオンの我が身を顧みない戦いぶりに次第に押され気味になっていきました。マリオンは傷ついても傷ついても、けっして後に引こうとしないのです。自分の命などなんとも思っていないかのようでした。
ついにマリオンの雷がリラの精の羽を燃え上がらせたとき、王子は剣を構えて叫びました。
「マリオン！　勝負だ！」
王子が一歩オーロラ姫から離れると、指輪の魔力によってオーロラ姫の寝る床の一面が周りからせり上がり、塔のようにそびえ立ちました。
マリオンは王子を習って剣を顔の前に立てると、次の瞬間蛇のように王子に襲いかかりました。王子はマリオンの人間離れした素早さに脂汗を流しながら、必死に自分を奮い立たせ、剣を戦わせました。マリオンは指輪の魔力を使いませんでしたが、恐るべき剣さばきで、ついに王子の剣をなぎ飛ばしてしまいました。剣を失った王子は死を覚悟しましたが、マリオンはもはや王子には目もくれず、指輪の魔力でオーロラ姫の元へ飛び上がろうとしました。
リラの精の光の矢がマリオンの腹を貫きました。
マリオンはどうっと倒れましたが、血を流しながらまだオーロラ姫を求めて立ち上がりました。
リラの精は床に這いながら光の矢を飛ばし続けましたが、もうマリオンには通用しませんでした。

王子も卑怯と思いつつ剣を拾ってマリオンに斬りかかりました。しかしマリオンは王子の剣を叩き折ると、光の宿らぬ目で王子を見据え、その肩にざっくり剣を振り下ろしました。剣は王子の肩を砕き、王子は激痛に気を失ってしまいました。

ベラが足を引きずりながらリラの精に歩み寄りました。

「指輪を寄こせ。あいつを止めるには指輪を使うしかない」

リラの精はベラには答えず、自ら、指輪をはめました。

オーロラ姫以外の人間には使えない特製の指輪も、もともと魔力を持つ妖精には容易に扱えました。

指輪は怪しい輝きを取り戻し、リラの精の手に吸い付きました。

リラの精は飛び上がると、指輪の魔力を使ってそれまでとは比べものにならない強い光をマリオンに放ちました。

マリオンは剣で避けましたが、光は剣を砕き、マリオンの肩を貫きました。

マリオンは剣を投げ捨て、指輪の左手を構えて凄まじい稲妻を迸らせました。

リラの精は魔力でなんとか持ちこたえましたが、近くにいたベラは吹き飛ばされてしまいました。

マリオンはリラの精のたじろぐ様子を見るとオーロラ姫の眠る塔に飛び上がりました。

リラの精は負けじと飛び上がりましたが、片羽を痛めているので上手く方向が定まりません。

マリオンはとうとうオーロラ姫の元にたどり着いてしまいました。

リラの精はマリオンがオーロラ姫を抱き上げるのを悔しそうに見つめました。

「マリオン！　あなたはオーロラ姫をどうするつもりなの！？」

「このままでいい」

マリオンは答えました。

「オーロラ姫は幸せの絶頂のまま眠りについた。最高に幸せな瞬間を夢見ながら、この若さと美しさを保ったまま、永遠に眠り続ける

のだ」
「そんなバカな！」
リラの精は悲痛な叫びを上げました。
「それがあなたのオーロラ姫への愛だと言うの？　ひとり夢の中に閉じこもることがオーロラ姫の幸せだと思うの？」
マリオンは光の宿らぬ目でリラの精を見つめて言いました。
「愛など、幻だ」
リラの精はマリオンの瞳の中にカラベラスの姿を見ました。
「それがあなたという人なのね……」
リラの精は悲しく言うと、キッとマリオンを睨みつけました。
「あなたなんかにオーロラは渡さない！」
リラの精が手を伸ばすと、それは長い蔦となってオーロラ姫の体に絡みつきました。
マリオンは絡みつく蔦をブチブチ千切り捨てましたが、蔦は後から後から伸びて、オーロラ姫の身体を覆い、マリオンを押し退けていきました。
マリオンは力を込めて稲妻をリラの精に叩きつけました。魔力でしのいだリラの精は怒りを込めて太いイバラの鞭を繰り出し、マリオンを塔から叩き落としました。マリオンは指輪の魔力を頼って何度もリラの精に襲いかかり、リラの精はイバラの鞭を振るって何度も何度もマリオンを打ち据えました。
マリオンの身体はズタズタに切り裂かれ、痛みのうめきを上げる代わりに血の涙を流しました。
リラの精ももはや美しい妖精の姿をしていませんでした。
全身からイバラの枝を生え出させ、恐ろしきイバラの精へと姿を変えていました。
血を流れ出させながらもけっして怯むことのないマリオンを追い払うため、イバラはどんどん伸び、根を張って巨大に成長し、ホールの隅で事の成り行きを窺っていた王様たちはたまらず逃げ出しました。

ベラは何度もリラの精の名を呼びましたが、もはやリラの精の耳には届かず、ベラは最後の力を振り絞って気絶した王子を城の外に運び出しました。

リラの精は泣いていました。体ばかりか、心まで指輪の魔力に犯されていき、恐ろしきイバラの怪物に変わっていきました。

とうとうマリオンの指輪は魔力を使い果たして砕け散り、マリオンはイバラの鞭にしたたかに殴られて、城の外に放り出されました。

オーロラ姫を奪おうとする敵はいなくなりました。しかし指輪の魔力にとらわれたリラの精は際限なく力を解放し、イバラはいつ果てるともなく成長していき、ついに城を飲み込み、イバラの森を出現させてしまいました。

第13章　王子の涙

一夜明けて、お城の建っていた小高い丘はすっかりイバラに覆われ、麓の街に住む人々は恐れをなしてどんどん街の外へ越していきました。

王様も国の中心を離れた別の城に移し、街は見る見る寂(さび)れていきました。

あれほどの大惨事にもかかわらず、けがをした者は多くありましたが、不思議と死者は一人も出ませんでした。

ただ一人を除いては。

肩に大けがを負った王子は、二週間もすると医者の止めるのも聞かず、王様に借りた軍隊を率いてイバラの森にオーロラ姫の捜索に向かいました。

イバラの森の外側はイバラが複雑に絡まり合って入り込む隙がありませんでした。無理にこじ開けて腕や足を入れようものなら、イバラに絡め取られ、危うく抜け出せないようになりそうでした。

王子は兵たちに斧を持たせ、いっせいにイバラを切り倒しに掛からせました。すると、傷つけられたイバラたちが怒り狂って、棘の鞭をしならせて兵たちに襲いかかってきました。

王子は大声で森の中にいるはずのリラの精に呼びかけました。

「ユリア！　わたしだ、シルバー王子だ！　どうかイバラを解き、オーロラ姫を解放してくれ！」

王子は何度も何度も呼びかけました。

毎日毎日呼び掛け続け、五日目の夕方、とうとう遙か彼方のお城の上空に人影が現れました。

王子は喜びに溢れて呼び掛けました。

「ユリア！　カラベラスはもう自分の城に帰ってしまった。どうかイバラを鎮めてオーロラ姫を返してくれ！」

しかしリラの精の返事は恐ろしい雷でした。

王子は困惑しました。部下から遠眼鏡を渡されてリラの精の姿を確認した王子は余りのことに言葉を失ってしまいました。
夕焼けの空を背にしたリラの精は全身をイバラに巻かれた恐ろしい姿をしていました。顔は怒りの表情に凝り固まり、目つきは獣のように恐ろしく、以前の優しさ優雅さは微塵も残されていませんでした。
リラの精、いえ、恐ろしきイバラの精は身をすくませるような恐ろしい声で吠えました。
「わたしのオーロラを奪おうとするものは生かしておかないよ！」
イバラの森全体が怒りに震え、大地を震わせ、兵たちは立っていられずに地に伏し、街に残っていた人々も悲鳴を上げて逃げ惑いました。
指輪の魔力に犯されたリラの精の心は、獣のように我が子を守る母親の本能のみに支配されているのでした。
「ユリア！　思い出してくれ、わたしだ、シルバー王子だ！」
諦めきれない王子が森に近づくと、ピシリと、棘の鞭が頬を打ちました。
王子は頬から血を流し、絶望的な気持ちで立ち尽くしました。

王子はオーロラ姫への恋心に苦しみました。愛の種によって最高の喜びへと燃え上がったオーロラ姫への恋心は、絶対的な力に引き裂かれたことによって王子の心を地獄の苦しみへ突き落としました。
王子の心は絶望的なオーロラ姫への恋心に焼き尽くされ、王子を狂わせました。
灰となった王子の心に唯一残ったのは、黒魔女カラベラスへの深い憎しみだけでした。

王子は自国に帰ると改めて軍隊を組織し、カラベラスの居城があるという国境の岩山へ進攻しました。
黒い森の中に立つ岩山は周囲を深く切り込んだ谷に囲まれ、唯一

山に通じる岩の橋はカラベラスのペットの竜が守っていました。
竜は攻め寄せる兵たちに炎を吐きかけ、長い毛に守られた尻尾でなぎ倒しました。弓矢を射掛けると、素早く空高く飛び上がり、その隙に橋を渡ろうとした兵たちは、哀れ、竜の巻き起こした大風にあおられて谷底深く落ちていきました。
軍隊は散り散りになり、一人が逃げ出すと、後から後から脱走者が続きました。
王子はひとり竜の前に立ちました。
「カラベラス！　もはや軍はない、わたし一人だ！　わたしが怖いわけではあるまい、姿を見せてくれてもいいだろう！」
山中の岩陰からカラベラスが現れました。
「これはこれはシルバー王子、このようなところへわざわざお訪ねになってくださるとは光栄の極みですわ」
カラベラスは優雅に微笑んでいましたが、王子を見下ろす目は意地悪く蔑(さげす)みの陰を色濃く落としていました。
「さて、わたくしに何かご用なのかしら？」
「ああ、そうとも、おまえに一言いってやろうと思ってな」
王子はオーロラ姫を思い、リラの精を思い、そしてディナを思い、深い悲しみと、人の心を弄ぶ魔女に対する怒りから、ボロボロと、大粒の涙を流して叫びました。
「おまえの胸の内には、ほんの一片でも、人の心に通じるものがありはしないのか！？」
カッと、カラベラスの美しい顔が怒りに歪みました。
「生意気な坊やが、消え失せろ！」
カラベラスは振り上げた右手に稲妻を生じさせて王子に叩きつけました。
一瞬早く、王子の行動を見守っていたダイアモンドの精が王子の体を魔法でダイアモンドに変えました。
ダイアモンドの体はカラベラスの稲妻を受け付けませんでしたが、その代わり、王子はもう二度と身動き出来なくなってしまいました。

カラベラスはダイアモンドの精を睨みつけましたが、ダイアモンドの精が何も言わないでいると、カラベラスも何も言わずに岩陰に消えていきました。

竜も谷底に帰っていきました。

崖から兵士たちが這い出してきました。橋から落ちた兵士たちはダイアモンドの精の魔法によってなんとか崖の岩肌に取り付き、命からがら這い上がってきたのでした。

ダイアモンドの精は兵たちに命じて、王子の体をイバラの森の麓に運ばせました。

せめてもの慰めに、王子も永遠に朽ちることのない体でオーロラ姫の眠りを見守り続けるのです。

ダイアモンドの魔法はダイアモンドの精の最後の最後の魔法でした。ダイアモンドの精自身にも魔法を解くことは出来ません。

奇跡でも起きない限りは・・・・・

第１４章　失われた心

マリオンは、奇跡的に命を取り留めていました。

あの日、イバラの精によって城の外にはじき飛ばされたマリオンは、街の親切な人によって家に連れ帰られ、介抱されていました。城の外には負傷した城の衛士たちが溢れかえっていましたから、マリオンも城の下働きの一人だろうと思われたのです。

マリオンを助けてくれたのは、皮肉なことに、葬儀屋の主人でした。マリオンのひどいケガを見て、どうせ助かるまいと思ったのです。

マリオンは命を取り留めました。しかし、一月（ひとつき）も意識を失っていたマリオンは、目覚めると、すっかりそれまでの記憶を失っていました。

主人はマリオンの身元をいろいろ尋ねてくれましたが、話を拾い集めているうちに、どうやら自分が助けてしまったのが黒魔女の手先のマリオンらしいと気づきました。

主人は、さてどうしようかと悩みました。どんなにひどい悪人でも命を救っておきながら、死刑が確実なお役所に届けるのは気が引けました。マリオンはすっかり記憶を失っていましたし、包帯を取っても顔中ひどい傷跡が残っていて、以前のルピネーを思い出す人はまずいないと思われました。

主人は重い気分でマリオンに忠告しました。

「体が回復したらすぐに街を出なさい。幸い街を逃げ出す人がいくらでもいるから、今なら目立つことはないだろう」

マリオンは葬儀屋の主人に言われたとおり街を出ることにしました。

しかしその前に、自分の倒れていたイバラの森を見に行くことにしました。

マリオンは真夜中になってからイバラの森の麓(ふもと)にやってきました。
黒々とそびえる森の周囲を歩いていると、月の光を浴びてキラキラ輝く像が見えました。
近づいていくと、突然何かが襲いかかってきました。
それは、合わせ鏡の精ベラの霊魂でした。
ふつう妖精は死ぬとその魂は自然に帰っていくものですが、何か特に強い思いを残して死んだ妖精は、人間と同じように、幽霊となってこの世にとどまるのでした。
ベラの幽霊は執拗にマリオンを襲いました。
マリオンはベラの激しい怒りに怯えるように、ただただ体を丸めて身を守るだけでした。
「どうした、カラベラスの操り人形め！　糸が切れて急に命が惜しくなったか！？」
「カラベラス・・・。カラベラスとはどういう人なのです？　そしてわたしは、いったい誰なのです？」
「ちくしょう、ふざけるんじゃないよ！　おまえのせいでオーロラ姫も、王子も、リラの精も！・・・」
無抵抗のマリオンを殴る蹴るするベラを、王子の声がいさめました。
『ベラ、そのくらいにしてあげなさい。彼は何も知らないのだ。カラベラスに作られた哀れな操り人形なのだ。心のない、人形なのだから』
「こころ・・・・」
マリオンはダイアモンドの王子に歩み寄りました。
「わたしには心がないと言うのですか？　ダイアモンドの像のあなたにあって、わたしにはないと言うのですか？」
ベラの幽霊がざまあみろという調子で言いました。
「そうさ、たとえ肉の体をしていたって、血が通っていたって、おまえには心がないのさ。今があるだけで、死んじまったらなーんにも残りゃあしないのさ」

ベラはポロポロ涙をこぼしました。
ベラの涙を見てマリオンは訊きました。
「それが、こころ……」
「バーカ」
ベラはハハハと笑いました。
「そういえばおまえは一滴の涙も流さなかったね？　あんたの親玉のカラベラスはそりゃあ泣くのが得意だったけれどねえ」
ベラは涙を流して狂ったように笑い転げました。
マリオンは何がなんだか分からず、物問いたげに王子を見上げました。
『哀れな。心がなければ愛もあるまい。おまえは本当にただの操り人形であったのだな。しかし、今となってはその方が羨ましいかもしれない』
王子のダイアモンドの顔はピクリとも動きませんでしたが、ただ、頬に浮き上がった大粒の涙が、ポロリと、地面にこぼれ落ちました。
マリオンは王子の涙の形をしたダイアモンドを拾い上げました。
「これがあなたの心ですか？」
『そうだ』
王子は答えました。
『おまえやカラベラスに踏みにじられた心の残骸だ。カラベラスに会うことがあったら見せてやるといい。あの女にほんの少しでも心があったなら、少しは嫌味にもなるだろう』

マリオンは王子に教えられた道を辿り、カラベラスの住む岩山に向かって歩きました。
十日後、マリオンは黒い森の中の岩山に辿り着きました。
谷から竜が現れました。マリオンは転がっている盾を拾い、竜の吐き出す炎をよけながら素早い動きで駆け抜けようとしましたが、竜は巨体に似ぬ素早さでマリオンの行く手を遮り、マリオンは行き

つ戻りつ竜を突破しようと挑戦しましたが、ついに力を使い果たし、竜の大きな手に捕まえられてしまいました。
マリオンは掲げていた盾を放り捨てました。
「わたしにはなんの力もない。わたしはただ、わたしを作ったカラベラスという人に会いに来ただけだ」
竜はカラベラスを呼ぶように岩山に向かって一声鳴きました。
「いいよ、ヴァイオレット。放しておあげ」
竜はマリオンを橋を渡った先に下ろしてくれました。
見上げると、岩陰に階段が隠れて上り、城への入り口が開いていました。
マリオンが入り口をくぐると、緑色の淡い光の滲む廊下が続き、やがて緑色の光溢れる大きな空間に出ました。
そこは山の頂上まで続く長大な吹き抜けのホールでした。
表面の黒くゴツゴツした岩山は、実は丸ごと巨大なエメラルドの原石なのでした。カラベラスの城はその原石の内部をくり抜いた巨大な空間に建っていました。
そのお城は、恐ろしい黒魔女には何とも不似合いな、かわいらしいお姫様のための宮殿でした。
玄関ホールを抜け、階段を上り、また小さな階段を上り、最上階の小さな部屋にカラベラスはいました。
カラベラスは黄金の椅子に座って小テーブルに向かっていました。机の上には水晶玉が置かれ、水晶玉を通して外の様子はすべて見ていました。
「とっくに死んだと思っていたわ。何をしに来たの？」
マリオンは王子のダイアモンドの涙を差し出しました。
カラベラスは手に取って、窓の光に透かし見ました。
「ダイアモンド。これはいったいなんなの？」
「シルバー王子の心です」
マリオンの答えにカラベラスは大笑いしました。
「とんだ間抜けだね。まったくおまえにはがっかりだ。わたしとし

たことがおまえのような出来損ないしか作り出せないとは、嫌になってしまうわ」
「わたしには心がないのだそうです」
「そうよ。おまえは作り物の人形ですもの、魂がこもっていないわ」
「心のない者は人を愛せないのだそうです」
「そうよ。でもがっかりすることはないわ。愛なんてただの幻、儚(はかな)い夢。いいえ、ただの思い違い。おまえが憧れるようなものではないわ」
「わたしに心をくださるわけにはいきませんか？」
「人形のくせに生意気なことを言うわね。壊れてしまったのかしら？」
カラベラスは右手にダイアモンドを握ると、左手でマリオンの顔を撫で回しました。
「まったくひどい傷を付けてしまって、せっかくの美しい顔が台無しだわ」
カラベラスの左手は温かい光を発して、マリオンの顔の傷を消していきました。
カラベラスはふと妙な気がしてまじまじとマリオンを見つめました。
「おまえ、目が見えるの？」
マリオンの瞳はカラベラスの顔の造形を追ってくるくる動いているのでした。
「どういうことだろう？　わたしがあれほど魔力を注いでもまともに見えなかった目が見えるようになっているなんて・・・」
カラベラスは手を当て、覗き込み、マリオンの目を調べました。
「分からない・・・。なぜだろう・・・・・」
カラベラスはマリオンの手を引いてソファに座らせました。
そしてマリオンの手を自分の頬から首筋に触らせました。
「どう？　何か感じない？」
マリオンは無表情に小首を傾げるばかりでした。

カラベラスはマリオンの手を戻して小さく笑いました。
「やっぱり、魂のこもらない人形か……」
マリオンは尋ねました。
「あなたも心がないのですか？　王子もベラもあなたには心がないという風に言っていました」
カラベラスは怒りに震えて立ち上がりました。
「ええ、その通りよ。黒魔女に心なんてあるものですか！」
カラベラスは握っていたダイアモンドを憎々しげに砕こうとしました。しかし、雷を走らせても、ダイアモンドはびくともしませんでした。
「ええーい、いまいましい！」
怒ったカラベラスは腕を振り上げてダイアモンドを床に叩きつけようとしました。
すると、ダイアモンドはフッと溶け、液体になってカラベラスの目の中に落ちました。
カラベラスは目を見開いたまま動けませんでした。
王子の熱い涙がカラベラスの心の奥底に溶け込んでいきました。
カラベラスはわなわな震えて言いました。
「わたしは、心などいらない……」
しかし言葉とは裏腹に、カラベラスの両の目からはカラベラス自身の熱い涙が止めどなく流れ出していました。
カラベラスはマリオンを見つめて言いました。
「おまえには本当に心がないのか？　このわたしを見てもなんとも思わないのか？……」
マリオンは無表情に首を振りました。
カラベラスは顔を歪めると、マリオンに抱きつき、思い切り抱き締めました。
「おまえが憎い……。おまえの魂を取り戻そうとわたしがいったいどれほどのことをしたか……」
カラベラスはマリオンを抱き締め、泣き続けました。

さんざん泣いて、すっかり潤みきった目でマリオンを見つめると言いました。
「ここにいるがいい。再びわたしがおまえを心から憎むようになるまで、おまえはわたしの慰みとなるがいい。
おまえの本当の名前は、アイリス」
カラベラスはアイリスに唇を重ねると、きつくかみ合わせました。

第１４章　失われた心（後書き）

残り３章。もったいないので明日に取っておきます。

２００７，１２，３０

第15章　少女

十年の歳月が流れました。
マリオンはアイリスと名を変え、カラベラスはカラベラと名を変え、二人は結婚し、クラリスという七歳になる娘をもうけていました。
クラリスはそれはそれは可愛らしく綺麗な女の子でした。
クラリスはカラベラの魔力を受け継ぎ、将来はカラベラスをも超える大魔女になるだろうと思われました。
カラベラは積極的に魔法の教育を施し、いずれ、クラリスの力によってイバラの森の呪いを解いてほしいと願っていました。
カラベラはアイリスを愛するようになってから、みるみる魔力を失っていきました。それでもじゅうぶん強い魔力を持っていましたが、最も強かったカラベラスの頃に作り出してしまったイバラの呪いを、今の魔力ではもはや解くことは出来ないのでした。
カラベラは過去に犯してしまった恐ろしい罪に怯え、苦しむこともありましたが、愛する夫と娘との生活は代償を払って余りある幸せなものでした。
アイリスはカラベラと暮らすうちに自然と表情豊かになっていき、クラリスが生まれてからはすっかり優しい良いお父さんになっていました。
十年の歳月を経てアイリスはそれなりに歳を取りました。カラベラもまた、アイリスと共に自然に歳を取っていきました。
百年間も娘の姿のまま歳を取らなかったカラベラにとってこの変化は不思議でもあり、嬉しいものでもありました。
アイリスは得意の彫金の腕を生かしてエメラルドや金銀で美しい装飾品を作り、カラベラはレース刺繍の生地を編み、親子三人で旅の商人に変装してあちこちに商売に出かけたりしました。
お金などなくてもなんでも出来るカラベラでしたが、仲の良い親

子として人前に出るのがとても楽しいのでした。
カラベラはクラリスにけっして人前で魔法を使わないように言っていましたが、クラリスは行く先々の子どもたちと仲良くなって追いかけっこなどして遊んでいるうちに、つい、フワリと体が浮かんでしまって、カラベラをヒヤヒヤさせました。
カラベラは幸せな毎日を送りながら、ふと、自分は恋人アイリスの魂を取り戻したのだろうか、それとも子どもがお人形を生きているもののようにかわいがるように、自分も無意識のうちに恋人に生き写しの生き人形を操っているだけなのか、疑ってしまうことがありました。
カラベラはそんな疑念を振り切って、今の幸せのみを楽しむように努めました。

クラリスは、ちょっぴり怖いけれどなんでも出来て子どものように無邪気で明るいお母さんと、優しく思慮深いお父さんが大好きでした。
しかし、クラリスにはそんな二人に、重大な隠し事がありました。
それはクラリスが五歳の誕生日を迎えた夜のことでした。
大好きなお父さんお母さんと遊んでいる楽しい夢の中に、突然黒い格好をした怖い顔の女の人が現れたのです。
「ふうん、あのカラベラスがいっぱしの母親面かい。まったく腹が立つったらないね」
クラリスは自分の大好きなお母さんが悪口を言われていると思ってその黒い女の人を睨みつけました。
「おやおや、母親に似て気の強いことだね」
クラリスは嘲りの笑いを浮かべる女に腹を立てて魔法の竜巻を起こしました。本当の世界ではまだ上手く起こせない竜巻も、夢の中のことなので簡単に起こすことが出来ました。
女は慌てて避けて、驚いた顔でクラリスを見ました。
「なるほど、さすがにカラベラスの娘だ。すごい力を持っているね」

感心した顔でニヤリと笑ったのは、合わせ鏡の精ベラでした。
「おいで、クラリス。これからおまえの母親がどんなにすごい魔女だったか教えてやるよ」
ベラはクラリスの手を取ると、夢の世界のトンネルを抜けて、輝くドアからイバラの森の上空に飛び出しました。
イバラの森は月明かりを受けて黒々とした不気味な姿を晒(さら)していました。
ベラはクラリスに教えました。
「この森は自然に生まれたものではない。おまえの母親、最強の黒魔女カラベラスの魔力が作り出した呪われたイバラの森だ！」
ベラはクラリスにカラベラスがオーロラ姫に死の呪いを掛け、それを阻止するために戦ったリラの精がカラベラスの作った呪いの指輪の魔力にとらわれてこのイバラの森を作り出してしまったことを教えました。
幼いクラリスは、かわいそうに、大好きなお母さんの過去の恐ろしい悪行を知ってひどいショックを受けました。
カラベラはまだ自分の過去についてクラリスには教えていませんでした。いずれ、クラリスが成長し、イバラの呪いを解く魔力を手に入れたときに話そうと思っていたのです。
『これ、ベラ。罪のない幼子を脅してどうする』
シルバー王子の優しい声がベラをいさめました。
ベラとクラリスの通ってきた夢の世界のトンネルは王子の夢へと続いていたのです。
クラリスはキラキラ輝くダイアモンドの像の前に下りていきました。
十年たっても、王子のダイアモンドの体は少しも風化することなく同じ姿勢のまま立ち続けていました。
『クラリス、と言うのだね？』
王子は優しい声でクラリスに話しかけました。
『わたしは驚いているのだ、あのカラベラスとマリオンの間に君の

ようにかわいい子が生まれるなんて。教えておくれ、二人のことを。二人は愛し合っているのか？　二人は君を愛しているのか？　君は二人を愛しているのかい？』

「もちろん、お父さんもお母さんも大好きよ。わたしは二人をとっても愛しているわ！」

クラリスは王子に一生懸命、自分たちがどんなに幸せに暮らしているか、話して聞かせました。

クラリスには王子のダイアモンドの顔が少し微笑んだように思えました。

『ベラ。どうやらカラベラスはこの子にこの森の呪いを託そうとしているようだ。わたしたちもこの子に任せてみてもいいのではないか？』

ベラは腕を組んで不機嫌に言いました。

「フン、自分の不始末を子どもに任せようなんてたいした立派な親だね」

ベラはクラリスに面と向かって指を突きつけました。

「あたしはあんたの母親を許す気はこれっぽっちもないよ。でも、まあ…、あんたの母親だものね、あんたがバカな母親の罪を償おうって言うのなら、手助けしてやらないでもないよ」

クラリスはムッとして言い返しました。

「もちろんよ！　お母さんがそれを望むならわたしが呪いを解いてみせるわ！　でも、あなたなんて大っ嫌い！」

王子は笑ってクラリスに言いました。

『ベラはひねくれ者で、口も悪いけれど、本当はいい妖精なんだよ』

その夜からクラリスは毎晩夢の世界のトンネルを通ってイバラの森に遊びに行きました。もちろんお母さんにもお父さんにも内緒にです。

ベラから魔法を習い、王子からオーロラ姫やリラの精のことを話してもらいました。

毎晩会っているうちに、王子の言うとおりベラがそんなに嫌な人ではないということが分かってきました。むしろお茶目なところのある楽しい人でした。

クラリスの才能は素晴らしく、ベラの教える人の夢に入り込む術の上達ぶりはベラも舌を巻くほどでした。

クラリスは王子の夢の世界に入っていって王子とお話しするうちに、ベラも叶わない特別の技を身につけてしまいました。クラリスは素晴らしい想像力によって、王子本人さえ忘れてしまっていたずっと昔の思い出を、それが今目の前で起こっているように再現することが出来るのでした。

王子の思い出の中で、クラリスはオーロラ姫やリラの精、王子や、若いお母さんやお父さんとも会うことが出来ました。

逆に、王子を自分の夢に招いて、昼間あった楽しい出来事を見せてあげることも出来ました。

暗く沈んだ王子の心も、クラリスとの夢の中の散歩によって少しずつ明るさを取り戻していきました。

思い出の世界はクラリスにとって楽しいことばかりではありませんでした。眠りについてしまったオーロラ姫や、残酷な黒魔女のお母さん、剣と魔力を振るうお父さんの恐ろしい姿、イバラにとらわれた悲しいリラの精の姿、そしてダイアモンドの体になってしまった王子。しかし、悲しみに震えるクラリスを王子は優しく励ましてくれました。王子にとってもクラリスは今やなくてはならない友だちであり、希望の光でもあったのです。

クラリスは毎日毎日イバラの森の奥に住むリラの精に心の声で呼び掛けましたが、リラの精は答えてくれませんでした。オーロラ姫の夢の扉もベラといっしょに一生懸命さがしましたがどうしても見つけることは出来ませんでした。でもクラリスは、自分がきっとイバラの呪いを解き、オーロラ姫を目覚めさせてみせると固く心に誓うのでした。

クラリスは毎晩夢の世界でお出かけして、朝はちょっとお寝坊さ

んになってしまいましたが、お母さんに怪しまれるほどではありませんでした。

楽しく幸せな毎日が過ぎていきましたが、それはある日突然、恐ろしい暴力によって破壊されてしまいました。

第１６章　イバラの森の戦い

ある日の朝のことでした。
今ではすっかり住む人の少なくなった麓の街を、国中から集まったような大勢の兵隊たちが樽を満載した数百の荷馬車と共に行進してきました。
ベラは不穏な空気を感じて、隊を指揮する隊長の心の中を覗いてみました。
すると、恐ろしい計画が進行していることが分かりました。
荷馬車に満載された樽には植物を殺すための強力な毒薬が詰められているのです。
ついに王様が、リラの精を殺してでもオーロラ姫を救い出そうと最終的な決定を下したのです。
「なんてバカなことを！……」
ベラはただちに作戦を中止させようと、移動した首都に飛び、王様、王妃様の心の中に入り込みましたが、オーロラ姫を失い、国も荒廃したお二人の心は、ベラさえ身震いするほど荒みきっていました。

ベラはクラリスにテレパシーを送り、自身もカラベラスの岩山へ向かいました。

クラリスはベラのテレパシーを受け、イバラの森で大変なことが起きていると、お母さん、お父さんに訴えました。
カラベラがクラリスがイバラの森のことを知っていることにうろたえているところへ、ベラが飛び込んできました。
「まったく、あのカラベラスがなんて様だい！　王様が毒薬でイバラの森ごとリラの精を殺そうとしているんだよ！」

ベラと共に、カラベラ、アイリス、クラリスは竜のヴァイオレットに乗ってイバラの森に急ぎ向かいました。
クラリスは今ではベラより強いテレパシーを使えるようになっていましたから、森に向かう間、一心にリラの精に危険が迫っていることを訴えました。しかし相変わらずリラの精からの返事はありません。
クラリスがリラの精に呼びかけている間、ベラが夢の世界での密会をカラベラに教えてやりました。
ベラはカラベラが、クラリスがずっと秘密を抱えていたことに驚き、心を痛めている様子を見て、ちょっぴり意地悪に、ざまあみろと思いました。
イバラの森が見えてきたとき、ひどい悪臭が漂ってきて、ヴァイオレットは堪らず地上に急降下しました。
王様の軍隊が竜を寄せ付けないために毒草をいぶして煙幕を張っていたのです。そして待ちかまえていた兵たちが弓矢を射掛け、長い槍を構えて進軍してきました。
「ちくしょう、馬鹿どもが！」
ベラは兵たちに襲いかかりましたが、体を失って風を操れなくなったベラは、体当たりすることぐらいしか出来ず、頑丈な甲冑を着込んだ兵たちにはうるさい蠅程度にしか思われませんでした。

カラベラたちが足止めされている間に、イバラの森をぐるりと取り囲んだ兵隊は、いよいよ毒薬の樽をぶちまけようと準備を整え終わりました。
それを悲しく見つめていた王子は、心の声でクラリスにお別れを告げました。
「王子！　いったい何をするつもりなの！？」
クラリスは王子のただならぬ決心を感じて叫びました。
王子は優しく温かな声で言いました。
『君のおかげで楽しかった昔の気持ちを思い出すことが出来た。わ

たしは幸せだったよ』
　王子は兵たちを止めようと、動くはずのない腕を差しのばしました。凝り固まった喉を震わせ、「やめろ！」と、叫びました。しかし石のきしむ音が微かにしただけで、王子の腕は、喉は、砕け、全身に無数に走った亀裂は一瞬にして王子の体を粉々に砕け散らせました。

「王子が、シルバー王子が死んじゃった！」
　クラリスはカラベラにしがみついて泣きました。
　カラベラはクラリスを抱き締め、悲痛な思いに身を震わせました。

　王子の命がけの制止は一人の兵にも伝わることなく、ついに、隊長の命令の下、いっせいに樽の毒液がイバラの根元に撒き散らされました。

　イバラの精は心を閉ざしながらも、森の周囲に集まった兵たちの殺気はとっくに察知していました。しかし、人間ごときに何が出来るかと、完全に甘く見ていました。
　毒液が撒かれた瞬間、イバラの精は全身に針を突き刺されたような激痛に悲鳴を上げました。

　森が悲鳴を上げて暴れ出しました。地響き立ててイバラが地面から立ち上がり、棘の鞭が憎い人間どもを求めて四方八方に伸び、狂ったように振り回されました。兵たちは堪らず、ありったけの樽を足で蹴り倒すと、森の周囲から一時撤退しました。
　イバラの精は全身の血管を犯す黒い液体に絶叫を上げてのたうち回り、怒りの呪詛を叫んで天井に伸び上がりました。
　イバラに支えられて森の上空に飛び出したイバラの精は真っ赤に燃え上がった目で逃げていく人間どもを見渡しました。
「おのれ、人間どもめ！……」

イバラの精は指輪の左手を振り上げ、地をも切り裂く雷を打ち下ろしました。
兵隊は雷に弾かれバタバタ倒れていきました。
「ぎゃあああああああ・・・！」
動けば動くほど毒は全身を駆けめぐり、血管は黒く膨れあがり、心臓は破裂しそうなほどドクドクと激しく鼓動しました。人間の作った毒を、植物の体を持つが故に、さしものイバラの精も排出する術を知らず、怒りにまかせて雷を迸らせ続け、ますます毒の血の苦しみに狂い暴れました。

攻め寄せる軍隊を風を操って防いでいたカラベラは、イバラの精の苦しみの咆哮を聞いてクラリスに言いました。
「雨雲を呼べるわね？　雨を降らせて撒かれた毒を洗い流すのよ」
カラベラはヴァイオレットに援護を頼むとクラリスと二人、ありったけの魔力を使って雨雲を呼び集め、イバラの森に雨を降らせました。
毒を撒き終えた隊はカラベラス退治の援軍に続々集まってきました。ヴァイオレットは火を吹いて応戦しましたが、どんどん数の増えていく兵隊は、横からも押し寄せてきて、火を吹き続けるヴァイオレットは喉がカラカラに渇いてしまい、ケホンケホンと咳をするようになってしまいました。
クラリスは押し寄せてくる兵たちに怯え、母と、父とを見上げました。
アイリスが言いました。
「わたしが行って、オーロラ姫を目覚めさせよう」
カラベラは驚き、恐い目をしてアイリスを見つめました。
「それは駄目よ。あなたは絶対に行かせない」
アイリスはいつものように静かな口調で言いました。
「オーロラ姫の無事を確認しなければ軍隊はけっして退かないだろう。オーロラ姫を目覚めさせなければ、リラの精もけっして元には

戻らないだろう。王子が倒れた今、姫を目覚めさせる可能性があるのはわたしだけだ」
　カラベラは涙を流して怒りました。
「嫌よ！　あなたは行かせない！　あなたは、そうしてまたわたしを裏切る気なのだわ！」
　カラベラはアイリスにすがりつきました。
「もうあなたを失うのは嫌。わたしだけを愛して。わたしへの愛こそ真実であると言って……」
　アイリスはカラベラの肩を押さえ、顔を向き合わせて言いました。
「オーロラ姫への純粋な愛のみがわたしの心。あなたが、わたしをそういう風に作ったのですね？」
　カラベラは顔を青ざめさせ、目を張り裂けそうに見開き、唇を震わせてアイリスを見つめました。
　アイリスは微笑んで言いました。
「しかし、わたしは愛とはどういうものなのか、知らなかったのです。愛というものを教えてくれたのは、カラベラ、あなたです」
　アイリスはカラベラに口づけしました。
「残念ながらわたしはあなたが愛する本当のアイリスではない。作り物の心には作り物の愛しか生まれないのかもしれない。けれども、クラリスは本物だ。わたしとあなたの娘。あなたがクラリスを愛していることをわたしは心から嬉しく思います。もし、わたしがいなくなってしまっても、わたしの心はクラリスの中にある。わたしはオーロラ姫の下へ行きます」
　アイリスはクラリスに言いました。
「クラリス、風を起こして兵士たちの間に道を作ってくれないか」
　クラリスは父親まで王子のように死んでしまうのではないかと心配しました。
「クラリス、わたしも帰ってきたいよ、おまえとお母さんの下へ、心からね。頑張るから、どうか力を貸しておくれ」
　クラリスは頷き、押し寄せる兵士たちに向かって竜巻を投げつけ

ました。
竜巻はイバラの森へ一直線に走っていき、兵士たちを巻き込み、投げ捨て、道を作っていきました。
アイリスはもの凄い勢いで走り出しました。
指輪の魔力を使ったときのように、まるで風のように。

アイリスは雨のザーザーと降る廃墟のようになってしまった街を駆け抜け、丘の麓に辿り着きました。
ハアハアと荒い息を吐き、ずぶ濡れになりながらダラダラ滝のように汗を流していました。
地響きがして足下の大地が裂けました。イバラの精と共にイバラの森がのたうち回っているのです。
その中に入っていくのは、死にに行くのといっしょでした。入った途端に、身を切り刻まれ、バラバラに引き千切られてしまうでしょう。
アイリスは剣か盾でも落ちていないかと辺りを見回しました。
キラリと、微かな輝きがありました。
粉々に砕け散った王子のダイアモンドの体でした。
アイリスは心の中でクラリスに呼びかけました。
『クラリス、王子の体を使ってわたしに鎧を着せてくれないか？』

クラリスは頷き、魔法を使おうとしましたが、難しくて上手く出来ません。
カラベラがクラリスを抱き上げてヴァイオレットの背に乗りました。へとへとに疲れていたヴァイオレットは喜んで空に飛び上がりました。
カラベラはクラリスの手を握って言いました。
「お母さんも手を貸すから、頑張りなさい。お父さんを守ってあげて」
クラリスは力強く頷き、魔力を集中してダイアモンドの鎧をまと

ったお父さんの姿を強く思い描きました。

アイリスの体の周りをダイアモンドのきらめきが巡り、輝く美しい鎧となりました。

「クラリス、カラベラ、ありがとう」

アイリスは荒れ狂うイバラの森に向かって歩み出しました。

カラベラはクラリスに言いました。

「毒草の煙幕が消えたらヴァイオレットといっしょにイバラの森に行ってちょうだい」

カラベラは独りヴァイオレットから飛び降り、ひしめく兵たちの中に降り立ちました。

カラベラは黒いマントをまとい、魔女カラベラスの姿となりました。

カラベラスは鋭い目つきで兵たちを眺め回し、言い放ちました。

「わたしの邪魔をする者は命を捨てることね。わたしは、優しくないわよ」

カラベラスは両手で風を操り、兵たちをなぎ倒し、毒草のたき火目指して進んでいきました。

アイリスは荒れ狂うイバラの森を進んでいきました。

毒に狂ったイバラたちはアイリスの存在に気が付かないようでしたが、その代わりイバラの樹木一本一本がバラバラにまるで予測の付かない動きをして、ぶつかり合い、倒れ込み、アイリスは素早い動きで避けましたが、避けきれず、何度も殴りつけられ、突き飛ばされ、危うく押しつぶされそうになりました。

ダイアモンドの鎧がなかったらとっくに息絶えていたでしょう。

アイリスはとうとうお城の中に入りました。

お城の中もイバラと蔦が、壁と言わず床と言わず天井と言わず、びっしり覆い、ザワザワと無数の蛇のように蠢き、痙攣するような

不気味な動きを見せていました。
アイリスはホールを抜け、階段を上がり、オーロラ姫の寝室を目指しました。
そして、頑丈にイバラで戒められたドアを力を振り絞って開けると、イバラの柱に守られたベッドの中に、あの懐かしいオーロラ姫が眠っていました。

第17章　真実の愛の口づけ

イバラの精は降りしきる雨によって毒を洗われ、息も絶え絶えながら、なんとか理性を取り戻しました。
「おのれ、つまらぬ人間どもめ！」
イバラの精は復讐に燃え、指輪の力で兵どもを皆殺しにしてやろうと思いましたが、城の内部に異変を感じ、ギョッとしました。
何者かがオーロラ姫の寝室に侵入し、オーロラ姫のベッドに近づいているのです。
「おのれ、許さん！」
イバラの精は怒りにどす黒い血を沸騰させてオーロラ姫の寝室に急降下しました。

アイリスはオーロラ姫の眠るベッドに歩いていきました。
天蓋から下がる薄布に手を掛けたとき、天井から鋭い棘の鞭が襲ってきて、アイリスは横ざまに壁に叩きつけられました。
天井を突き破って伸びるイバラの柱の上方から蔦にぶら下がったイバラの精が降りてきました。
イバラの精は恐ろしい顔でアイリスを睨みました。
「汚らわしい手でわたしのオーロラに触るんじゃないよ！」
イバラの精は怒りにまかせて棘の鞭でアイリスを打ち据えました。しかしアイリスはダイアモンドの鎧で鋭い棘から身を守られています。
イバラの精はどす黒い血管を浮き立たせて、指輪の手を突き出すと、もの凄い稲妻を迸らせました。
アイリスはショックでひっくり返り、全身からもうもうと湯気を立ち上らせました。
「ざまあみろ」
イバラの精は残酷に笑って、とどめを刺そうと構えました。

「リラの精、いや、ユリアよ。わたしだ、マリオンだ」
アイリスはひっくり返って立ち上がれないままイバラの精に呼びかけました。
「あなたを恐ろしいイバラの精へと変えた張本人だよ」
「マリオン・・・・・」
イバラの精の目は一瞬静かに過去を思いやりましたが、ますます怒りの炎を燃え上がらせました。
「思い出したか。それでは、自分の過去の姿も思い出しただろう？
その姿を思い浮かべながらこの鎧に映して今の自分を見てみろ」
お城の鏡はほとんどが割れ、またイバラが覆って見えなくなっていました。イバラの精はいぶかしげに輝くダイアモンドの鎧の胸に自分の姿を覗き込みました。
その恐ろしい顔姿にイバラの精は悲鳴を上げ、絶叫しました。
しばらくイバラの精の絶叫する様を眺めてから、アイリスは言いました。
「直接あなたをその姿にしているのは、その手にしている指輪の魔力だ。よく思い出せ、オーロラ姫の指からその指輪を引き抜いたものが何であったかを」
イバラの精はぶるぶる震えながら必死に思い出そうとしました。
「王子の・・・真実の愛・・・・・」
「そうだ。あなたはオーロラ姫への愛ゆえに指輪の魔力を使ってしまった。オーロラ姫の愛があれば、あなたは指輪の魔力から解放されて元の姿に戻れる」
「それではなぜだ！？」
イバラの精はアイリスに向かって叫びました。
「なぜおまえが来た！？　なぜ王子が来ない！？」
アイリスもさすがになんと答えようか迷いました。
しかし、イバラの精は気づいてしまいました。
「それが、王子か？　ダイアモンドになり、粉々に砕け散った、それが王子のなれの果てか？」

イバラの精は狂ったように笑い出しました。
目からはボロボロ黒い涙を流していました。
「ではいったい誰がオーロラを目覚めさせる？　おまえか？　おまえがその汚らわしい唇でわたしのオーロラに口づけしようと言うのか？　許さない。絶対許すものか！」
イバラの精は再びアイリスに指輪を突きつけました。
「オーロラの真実の愛は失われてしまった。おまえの言った通りだ。オーロラは永遠に楽しい幸福な夢の世界に生き続ける。わたしはこの醜い姿のまま永遠にオーロラの眠りを守り続ける」
「それではわたしを殺すがいい。カラベラスの愛するこのわたしをな」
「なんだと！？」
「娘もいるよ、クラリスというとてもかわいい娘が。わたしが死ねば二人はさぞかし悲しむことだろう。どうだ、最高の復讐だろう？」
「あの女が、愛だと？　娘だと？」
イバラの精の憎しみの炎は最高に燃え上がりました。
「死ぬがいい、カラベラスの夫め！　あの女に地獄の苦しみを与えてやる！」
指輪がイバラの精の憎悪を受けて恐ろしい光を発しました。
天井のイバラを砕いて、クラリスを乗せたヴァイオレットが飛び込んできました。
「やめてリラの精！　これ以上みんなで苦しむのはやめにして！」
指輪の光が弾け飛び、すべてが真っ白な光の中に飲み込まれました。

真っ白な世界の中にオーロラ姫の眠るベッドだけがありました。
その傍らに、幼き日のオーロラ姫を思わせる少女が両手を目に当てて泣いていました。
リラの精は少女に歩み寄って少女の目線に顔を寄せました。
「オーロラ・・・」

少女は涙に濡れた目を上げてリラの精を見ました。
「ユリア・・・」
それは紛れもなくオーロラ姫であり、オーロラ姫は十七歳の姿に成長するとリラの精を抱き締めました。
「オーロラ・・・、わたしの愛するオーロラ姫・・・」
リラの精はオーロラ姫を抱き締め、幸せの涙を流しました。

イバラの精がハッと気づくと、部屋はイバラに覆われたままでした。
オーロラ姫のベッドの横に、ヴァイオレットから降り立ったクラリスが涙を溜めた目でじっとイバラの精を見ていました。
オーロラ姫との再会はクラリスの心の叫びが見せた幻だったのです。
イバラの精は両の手を硬く握りしめてぶるぶる震えながら絞り出すように言いました。
「オーロラ・・・、あなたに会いたい・・・・」
イバラの精はハッとしてベッドに眠るオーロラ姫を見ました。
オーロラ姫の閉じた目から涙が浮かび上がり、ポロリとこぼれ落ちました。
「そんな・・・・・・」
あれほど何度呼びかけても答えてくれなかったオーロラ姫の心が・・・・・
イバラの精はオーロラ姫の下へ行こうとして、自分の醜く恐ろしい姿を思い出して悲しみの涙をこぼしました。
アイリスはなんとか起きあがってクラリスに言いました。
「クラリス、リラの精の指から雷の指輪を取っておあげ」
クラリスは恐る恐るイバラの精に近づくと、そっと手を持ち上げました。
クラリスが触れると、指輪はスルリと抜け、イバラの精の体からポロリポロリとイバラが抜け落ちていきました。

アイリスは王子の魂に呼びかけました。
「王子よ、わたしの顔を覆ってくれないか？　この顔をあの子に見せたくない」
アイリスの顔は雷に打たれて真っ黒に焼けただれていました。
ダイアモンドはアイリスの顔を覆い、美しい仮面となりました。
「ありがとう。さあ、オーロラ姫の下へ行こう」
アイリスは一歩一歩、倒れそうになる体を鎧で支えて姫のベッドへ歩み寄りました。
アイリスの体は雷に打たれるまでもなく、あちこちの骨が折れ、内蔵が破れ、ボロボロになっていました。
ダイアモンドの手が薄布を開き、オーロラ姫の姿がはっきり現れました。
オーロラ姫はディナとっしょに作ったレースを飾ったドレスを着て眠っていました。
『やっと、会えた・・・・・』
ダイアモンドの仮面がオーロラ姫の唇に触れると、それはシルバー王子の姿となり、王子の口づけを受けたオーロラ姫はぱっちり目を開きました。
「ああ、シルバー王子！」
姫は喜びの笑みを溢れさせ、王子に抱きつきました。
「オーロラ姫・・・」
王子もしっかり姫を抱き締めました。
オーロラ姫はついでリラの精に手を差し伸べました。
すっかり元通り美しい姿に戻ったリラの精は喜び勇んでオーロラ姫に抱きつきました。
クラリスは、シルバー王子に尋ねました。
「王子様・・なの？　お父さんは、わたしのお父さんはどこ？」
王子は悲しい目でじっとクラリスを見つめ、言いました。
「わからない。わたしを目覚めさせるとどこかへ消えてしまった・・・」

お城の入り口に辿り着いたカラベラスは、アイリスが消えてしまったことを知って、呆然と立ち尽くしました。
しばらくしてカラベラスは気を取り直し、お城の中へ、クラリスの元へ行きました。
オーロラ姫の寝室に入るとカラベラスは膝を着いて姫と王子に礼をしました。
「あなたは、ディナなの？」
現実の世界に舞い戻ったオーロラ姫は一人歳を取ったディナに目を見張りました。
カラベラスは必死に悲しみを抑えてリラの精にお願いしました。
「どうかこのクラリスをいっしょにお連れくださいませんか？　この子はオーロラ姫を目覚めさせた手柄があるはず。姫様の友人としてお迎えしてくだされば嬉しいのですが」
クラリスの肩に出番がなく様子を窺っていたベラが降りてきて、リラの精に手を振って合図しました。
リラの精は頷き、カラベラスの願いを聞くことにしました。
オーロラ姫はディナと話したかったのですが、その痛ましく悲しい様子についに声を掛けられませんでした。
リラの精に促され、オーロラ姫は王子と共に、不安そうなクラリスを伴い部屋を出ました。

オーロラ姫はイバラに覆われた城の有様にびっくりしましたが、指輪の魔力を失い、毒に犯されたイバラの森は、急速に枯れ衰えていっていました。
オーロラ姫が城を出て歩いていると、戦況を見守っていた王様が、オーロラ姫発見の報告を受けて駆けつけました。
大喜びで駆けてくる王様のすっかり老け込んだ顔を見て、オーロラ姫は改めて時のたったことを思い知りました。

カラベラスはオーロラ姫の寝ていたベッドの上に、一粒のダイアモンドを見つけて、つまみ上げてベッドに腰掛けました。
ダイアモンドを眺めているうち、涙が溢れてきて、カラベラスは肩を震わせて嗚咽(おえつ)しました。
イバラの枯れてぽっかり空いた天井に、雲の消え去った青空が覗いていましたが、やがて赤く染まり、ついに星が輝き始めました。
カラベラスはダイアモンドに語りかけました。
「このちっぽけなガラスのかけらがあなたの心だというの？　それじゃあこの虚しさはなに？　心に開いたこの穴はなんなの？　作り物なんかじゃない、欠けてしまったわたしの心がそのままあなたの心。あなたがいなくなってしまったから、あなたの心が感じられなくなってしまったから、……寂しい。また一人になるのは、嫌……」
カラベラスは涙も枯れ果て、疲れ切ってしまいました。
カラベラスのもう片方の手にはクラリスが捨てていった雷の指輪が握られていました。
指輪はすっかり魔力を失い、三つの石は灰色に曇っていました。
「そうだ、わたしはまた魔女になろう。あの寂しさには、もう、耐えられない……」
カラベラスは指輪の三つの石を砕き落とし、ダイアモンドをはめ込みました。
カラベラスは指輪をはめ、握った手を胸に当てました。
「クラリス、ごめんね……」
カラベラスは残っているすべての魔力を指輪に注ぎ込みました。
指輪は凄まじい光を発し、カラベラスを、城を、森を、すべて飲み込んでしまいました。

一夜明け、クラリスが来てみると、そこはまた新しいイバラの森になっていました。

しかしイバラの茎は緑に輝き、真っ白な薔薇の花をいっぱいに咲かせていました。
クラリスは森の中に入っていきました。
森の中は温かな光に満ち、お城はなくなり、代わりにひときわ大きな薔薇の大木が生えていました。
大木の枝の分かれを寝床にして二つの白い影が横たわっていました。
「クラリスが来たわ」
白い影の一方がもう一人に囁きかけました。
「あなたは心を手に入れた。わたしの心の中にあなたの心もいっしょにある。今度こそ、あなたの心は永遠にわたしのもの」
それは白薔薇の精に生まれ変わったカラベラとアイリスでした。
カラベラは勝ち誇ったような笑顔でアイリスを見つめました。
カラベラスと指輪の魔力で若く美しい姿に生まれ変わった二人でしたが、命をつなぐために背中に生えた緑の管でこの中心の大木につながり、もはや永遠にこの森から外には出られないのでした。
アイリスはカラベラに言いました。
「永遠なんて、あなたといっしょなら一夜の夢のようなものだろう」
二人は口づけをかわし、愛しい娘を迎えるために地に降り立ちました。
クラリスは二人を確かめると笑顔で駆け寄り、抱きつきました。

終わり。

第１７章　真実の愛の口づけ（後書き）

この小説は６年ほど前に書き上げたものですが、１０年以上手を加え続け、全面的な改作も６、７回は行っています。今回２年ぶりに読み直して、この物語が自分にとっていかに特別なものであったか改めて思いました。逆に完全に自分一人の自己満足になってしまっているのかなあと寂しい気もします。楽しんでいただけたのなら嬉しいのですが。ありがとうございました。

２００７，１２，３１（２００４，４，２７）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3288d/

私版眠れる森の美女

2010年10月8日14時55分発行